
君の瞳に映る僕

ブッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の瞳に映る僕

【Nコード】

N3431E

【作者名】

ブッシュ

【あらすじ】

はじめまして！僕は県立^{シゲマ}姿熊高校に通っている2年の並川^{なみかわ}東馬^{とうま}です。うちは父・母・妹の4人暮らしなのですが、最近ちょっと妹には困っています……因みに僕には好きな人がいます。同じクラスの千草^{ちぐさ}美鈴^{みすず}ちゃんです。もう可愛くて可愛くて……他にも個性的なクラスメートが大勢で……特に大智^{だいち}なんかは……まあ、そんなこんなで色々大変な学園生活を送っています。あつ、そろそろ授業が始まっちゃうよー！じゃあ、これからよろしくね！

第1話 今日から僕は2年生！

微かな風で道に咲いていた桜の花が飛び舞っていた頃、僕は心地良く眠っていた。

ここはI県にあるとある町の住宅街の一軒家の2階。

僕、並川東馬なみかわとうまはこの春で県立姿熊高校けんりつ シングマの2年生になったのだが……

(ピピピピ……)

「うーん……もう少し……」

寝言を言いながら鳴り続ける目覚まし時計のアラームを切った。
そして僕は再び夢の世界に飛び立つはずだったが……

(ダッダッダッダ……ガチャッ)

「こらあゝ！起きなさい！」

そう、毎朝毎朝再び夢の世界に飛び立とうとすると現れる輩やからが一人いた。

「うーん……あと5分だけ……」

僕はそう呟くと寝ようとしたその時、足の方で急に重みが増ました。

「ほらあ、起きないといつもの目覚めのキスを……」

僕はハッとして飛び起きた。

「つてかしてないから！そついうのは止めろつて、瑞葉」みずは

そつ、この騒がしい輩こそ我が妹の瑞葉であつた。

「あつ、そつだつた。お兄ちゃん、遅刻するよ」

僕は妹の言葉でとつさに目覚まし時計を見た。

8：20……

「ああゝ！遅刻するうゝ！」

僕は急いで寝巻きを脱ぎ捨てるとこの1年間で身につけた最速5・4秒の早業で制服に着替え、カバンを持って1階へと駆け降りていった。

起床からわずか2分で身支度を整えてパンをくわえて家から飛び出していった。

家から学校までの時間は最速で12分。

学校の始業が8：40から。

「ヤバイ……！」

僕は全力で学校へと走つていった。

そのころ家では……

「あゝあ、また今日もやりそびれちゃつた。まあいいか、今日から私も……」

独り言を漏らしながら瑞葉は東馬の部屋を後にした。

8：35……

「セツ、セーフ……」

教室の前で僕はほっとしたその時後ろから頭を叩かれた。

「いや、アウトだ。並川。今日は入学式の準備があるから10分前に来いと言ったはずだが？」

今僕の後ろに立っているのは紛れもなく担任の葛城源三郎かつらぎげんざぶろうであった。

「いや……それは……そのお……」

言い訳を考えようとしたのだが、こういう時に限って妙に良い口実が出てこなかった。

「並川、お前は朝来なかったんだから片付けを一人でやれ！いいな！？」

「……はい……」

僕は渋々引き受けると自分の席に着いた。

「大丈夫か、東馬？後で俺も手伝うからよ！」

隣の席の大智だいちが僕に小声で言った。
かみしげだいち

神重大智は中学校から一緒に親友で幅広い情報網を持つことからこの学校ではスパイダー……又の名を蜘蛛神くもがみと呼ばれていた。

因みにスパイダーとは蜘蛛の巣のような情報網も持っていることからどこかの誰かが名付けたらしい。

また、うちの学校ではクラス替えが行われなかったため担任の源ちゃんとは2年目の付き合いとなる。

ところで一つ疑問に思ったことがあっただろう……
担任の葛城先生の妙なあだ名についてだが、それはまた別の機会に
話す事にしよう。

「ありがとう……でも、いいよ。俺一人でやれって言われているし
……」

僕は親切な親友の助けを断った。

「んじゃあゝそろそろ入学式だからみんな体育館で並ぶように！以
上」

それを言うと源ちゃんは一足先に体育館に向かっていった。

僕たちもまた体育館に向かった。

9：00……

全校生徒が集まり、入学式が始まった。

思えば去年は僕たちがこのカーペットの上を歩いたが、月日が経つ
のは早くも迎える側になっていた。

順調に式が進んでいき、新入生代表の挨拶まできた。

(……挨拶。新入生代表、並川瑞葉)

「はい」

僕は一瞬耳を疑った。

が、すぐにそれは勘違いだと思った。

「まさかうちの妹が……ねっ……」

僕は一人呟きながらステージを見上げて息を呑んだ。

「……………なっ……………瑞葉!？」

僕は改めて頭の中を整理させた。

「確かうちの妹は今年で……………」

そのことをすっかり忘れていた僕は焦った。

「高校1年じゃん!」

我が妹が何故ここにいるのか…………

それは自分でも理解の域を越したものだった。

だが、無事に何事も無く入学式が終わった。

思い返して見ればあの頃…………

「お兄いゝちゃゝん!」

時は3年前、まだ僕が中学生の時だった。

その日は入学式…………

「静かにしてろって言ったのに……………」

1人恥ずかしさのあまり下を向いてぶつぶつと呟いていた。

「ねえゝねえゝ、あの子だれえゝ?」

周りの声が聞こえてきても僕は他人のふりを続けた。

そう、我が妹は式の途中に僕のいる方に向かって手を振っていた。

当然のことながら先生達は見えていられない状況に陥ったので必死に

なつて我が妹を静かにさせようとしていた。

「はあゝ……」

僕はため息をつくと見ていらなくなつたのでまた下を向いて過した。

その日から1週間、クラスでは僕の事を冷やかして『お兄ちゃん』と呼ぶ奴が後を絶えなかつた。

そんな事件……後に語られる『4・08事件』があつたので、もう二度と妹と同じ学校には進むまいと胸に誓っていた。だが、現実には甘くは無かつた。

「で……」

なんているんだあゝ!？」

僕は放課後の体育館で1人叫んだ。

第1話 今日から僕は2年生！（後書き）

初めての人はこんにちは。2度目の人には申し訳ありません。
今回の修正で各話ごとにキャラクター紹介をしていきたいと思いま
す。

記念すべき第1話ということで今回は主人公について紹介したいと
思います。

｝キャラクター紹介 1｝

・並川東馬

「妹の求愛行動に頭を抱えながらも青春を謳歌している高校生」

生年月日：1991年 12月23日 （ヤギ座）

血液型：O型

身長：165cm

体重：55kg

趣味：特に無い。強いて言うなら、漫画を集める事。

特技：絶品料理を作る事

特徴：どこにでも居そうな一般の高校生。

髪の手入れはしておらず、寝癖がついたまま登校する事もし
ばしば。

若干凛々しい顔に、目は二重。

好きなタイプの女性：千草美鈴一筋のはず……

得意科目：国語

苦手科目：数学、理科

第2話 お姫様は転校生！？

入学式の後片付けが終わると同時に部活終了のチャイムが校内に鳴り響いた。

僕は疲労感と不安感に悩まされながら帰宅した。

「ただいま……」

この言葉を発してから僅か0・5秒後、妹が飛び掛ってきた。

「お帰り〜」お兄ちゃん」

僕は後片付けの疲れで体が思うように動かずに、妹を受け止めてその場に倒れた。

「お兄ちゃん……？ねえ〜お兄ちゃん！」

遠のく意識の中で妹は僕の事を呼んでいた。
次第に手足の感覚が無くなっていき、そして深い眠りについた……。

「こ……ここは……？」

いったい僕はどこに辿り着いたのだろう……
長い長い時を経て僕はいつたい……

「おつ、気がついたみたいだな。大丈夫か、東馬？」

なんとなく聞き覚えのある声……

僕よりの早く亡くなった友達っていただろうか……？

というよりの何か最近聞いたような声が……

「大智……？」

なんで大智がここに……？

というよりも大智もまた……

「死んでねえよ！」

恐ろしい突っ込みだった。

てか大智よ……いつの間に人の思考を読めるようになったんだ……？
また一つ不安要素が増えつつも薄れていた意識を取り戻した。

「ここは……？」

「お前の部屋だよ。昨日お前は家に帰ってから玄関で倒れて、お前の妹さんが親切にも部屋まで運んでくれたらしいぞ。感謝しろよ」

道理で足に引きずられた痛みがあるわけだ……
それに良く見て見ると部屋を漁られた形跡が……

「てか、昨日って……僕は丸1日寝込んでいたってわけか……」

1人で頂垂うなだれていると大智が再び話を切り出してきた。

「そうそう、今日は俺のほかにもう1人来てるんだ。そろそろ部屋に来る事だと思うけど……」

丁度いいタイミングで部屋のドアが開いた。

「おまたせ」

ドアの先にいたのは我がクラスのアイドル的存在である千草美鈴ちくさみすずであつた。

「なんで千草さんがここに……？」

驚きと喜びが入り混じり何ともいえない感情に浸っていた。

「なんか昨日並川君が学校来なかったから神重君に聞いたの。そして家で倒れちゃったって聞いて……そうしたら神重君が並川君の家に行くって言ってたから私もついてきたの」

ナイス大智！と思いながら僕は心の中でガッツポーズをとった。

思えば千草さんのこと思い始めたのも丁度1年前からだった……

1年前……

その日は清々しい朝だった。

妹は中学校の入学式の準備で朝早くから家を飛び出ていった。

妹から解放されてようやく掴つかんだ幸せ……

それをかみ締めながらいつもより早い時間帯に家を出た。

新しい学校に新しい世界……

普段の何十倍……いや、何百倍もの新鮮感に心が躍っていた。

そんな時だった。

道の真ん中で右往左往しながら辺りを見渡している女の子がいた。

それも僕が今日から通う学校の制服で……

時間が早いものだからまだ人気がひとけ少なく、この道にはその女の子を除いて僕1人だけだった。

こんな事をしては人がいいように思われるかも知れないが、僕は見過ごす訳にはいかない性質たちのでその子に声をかけてみた。

「どうかしましたか……？」

それまで誰もいなかったせい、その子は一瞬ビクツとしてからこちらを向いた。

セミロングの髪を風になびかせながら振り向いたので、僕は一瞬心を奪われた。

「はい、実は昨日こちらに越してきたばかりで道に迷ってしまっています……」

あやふやな説明で良く分からなかったが、言いたい事だけは何となく分かったような気がした。

「要するに……学校に行きたい……と？」

「……はい！」

良く見て見ると少し幼い感じの顔立ちで、丸く大きな目につぶらな瞳……

ルックスを見れば大抵の男子は1秒もかからずに虜とりこになるだろう。僕もその中の1人だった。

「うちの学校の子だね？一緒に行かない……？」

傍はたから見ればナンパのように思われるだろう……
だが、僕はそんな厭いやらしい思いで誘っている訳ではない事はわかって欲しいところだった……

「あのオ、これって……ナンパですか？」

やはり誤解されてしまったらしい。

「いや……それは違って……」

ぼくは懸命に誤解を解こうとしていると突然その子は笑い出した。

「冗談です。分かりますから……貴方がそんなことしないで。見れば分かりますから」

その子の言葉で僕は力が抜けたように苦笑いをした。

「では、行きましょうか？」

その子は不意に僕の手を握って歩き出した。

このときからだった。

僕はその子に引かれていったのは……

周りからどんな目で見られていたんだろうか……

少し殺気立ったものも感じられたが、今こうして可愛い女の子と手をつないで歩いていることが何よりの幸せだった。

幸福な時間というものは短く感じられる物だった。

僕たちはすぐに学校に着いた。

「ありがとうございました。それでは、また……」

そう言ってその子は去っていった。

後で後悔した事は、その時に名前を聞いていなかったことだった……

その後僕は1人で新しい教室へと足を進めた。

（ガラガラ……）

教室のドアを開けると重たい視線が僕に集中した。

それもそのはずだ。

入学式当日の朝から女の子と手をつないで登校すれば誰にだって恨まれるだろう。

それもとびっきりの可愛い子とだから……

僕は指定された席に着くとすぐに先生が入ってきた。

「はい、静かに！席に着いた」

それまで騒がしかった教室は一変していっぺん静まり返った。

「今日から私がお前達の担任をする事になった葛城源三郎だ。よろしく」

名前古ツ！！

教室にいる皆が同じ反応を取った。

外見はまだ30歳位だろうが、妙に名前が古すぎていまいち顔と名前が一致しなかった。

「まあ、親がこんな名前付けちまったから仕方ないけど……呼ぶときは『源ちゃん』って呼んでくれ！」

前々から名前の事は気にしていたのだろう……葛城先生はそう呼ぶように頼んだ。

というよりも半強制的と言っても過言ではないだろう。

そんなこんなで時間が過ぎて行く中、葛城先生……いや、源ちゃんは突然思い出したかのように話を切り出した。

「そうそう、お前達の式の前に転入生を紹介しないと！ちょっと待ってる！」

そう言うとき源ちゃんは教室のドアを思いっきり開けると職員室へと駆け出していった。

「てか、普通ドアの後ろとかで待たせるだろう……」

僕は少々愚痴を溢しながら辺りを見渡した。

この教室の中では……いや、この学校の中では知っている人物は1人たりともいなかった。

僕の通う県立姿熊高校は県屈指の公立の進学校であったため、僕の中学校からは過去30年間の内に僕を入れて2人しか進学できていなかった。

それだけこの高校が凄いことだった。

僕の中学校がよほどのバカではないことを除いては……何故この高校を選んだかは……

この話をするとき気分が悪くなるので止めておこう。

「待たせたな！じゃあ、入ってきてくれ」

源ちゃんは帰ってきて早々早口で言った。

するとドアの後ろから少し小さめの女の子が入ってきた。

「あッ……君は……」

僕は驚き立ち上がった。

「あら、貴方は今朝の……」

何故だかラブコメのような雰囲気になり、教室中の視線が僕に集まった。

が……

「……いつまで立ってるつもりだ？そんなに立ちたいなら廊下に立たせてやるのか？」

源ちゃんに言われて初めて僕は1人立っていたことに気がつき、顔を赤らめて席に着いた。

「じゃあ、よろしく」

源ちゃんは真新しいチヨークを転校生に渡した。

「はい。——私の名前は千草美鈴です。——なので、よろしく御願います」

自己紹介が終わると喝采^{かつさい}と拍手の渦が巻き起こった。

「じゃあ、席は……並川の隣が開いているからそこでいいな」

源ちゃんはそう伝えると千草を席に着かせた。

教室中の男子の殺気を感じたような気がしたけど、気にしないようにした。

千草は席に着くとすぐに僕の方を向いた。

「よろしく御願います、並川君」

可愛い笑みを浮かべると僕はまたその純粋な瞳に飲み込まれていった。

「ああ……こちらこそよろしく。ところで……」

今朝の話をしようとしたところで話が遮られた。

「じゃあ、そろそろ時間だから廊下に並んでくれ！」

それを聞くと千草は席を立ってしまった。

その後僕も仕方なく席を後にした。

それが彼女との出会いだった。

あれから1年……

未だ何も進歩が無い自分に怒り苦しんでいた。

しかし、今日は違う。

千草がうちにいるのだから。

そして今日こそ……

そう胸に誓った。

「あッ……ありがとう。わざわざお見舞いなんかに来てもらっちゃ
って」

落ち着け……落ち着くんだ、自分！

そう言い聞かせながら次の言葉を考えた。

「ううん、いいの。クラスメートとして当然のことだもん」

ああ……そうですか……クラスメートとして……か……
僕はその一言で我を失いかけた。

「あつ、そうだった。並川君のためにさつき下でお粥^{かゆ}作ったんだ。食べてくれる？」

「も、もちろんだよ！」

僕はすぐさまそう答えると千草が作ったお粥の入った土鍋が目の前に出された。

土鍋を開けると中からおいしそうな……おいしそうなお粥が……無かった。

土鍋の中にはまるで火山のマグマのように燃え立つ真っ赤な液体があった。

「どうしたの、並川君……？」

心配した千草は僕に声をかけてくれるが、それはいくらなんでも……

「お……おいしそうだね……い、いただきます」

死を覚悟して僕はその真紅の液体を口にした。

「どう……？美味しい……？」

そんな言葉が途切れ途切れに聞こえてきた。

遠のく意識の中、最後に見た物は部屋の外で密かに笑っている妹の姿だった。

瑞葉よ……やはりおまえだったのか……

その言葉は発せられぬまま僕は再び深い眠りについた。

第2話 お姫様は転校生！？（後書き）

｝キャラクター紹介 2｝

・並川瑞葉

「両親の不在の元、一つ屋根の下で兄と共同生活をしている兄一筋の妹」

生年月日：1992年 8月10日

血液型：B型

身長：152cm

体重：?kg

趣味：兄、東馬の観察。

特技：殺傷力強大な手料理を作ること。

特徴：髪は肩より少し長めの栗色のセミロング。（中学時代の部活により脱色したもの）

兄と同じく目は二重。（親の遺伝だと思われる）

幼げな顔立ちで見る物の心を魅了する。

好きなタイプの男性：一途な兄思い

得意科目：一般教科なら大抵得意。

苦手科目：家庭科（主に料理はダメ。裁縫の方も……）

第3話 瑞葉の……

先の出来事から2日後、ようやく僕は学校に戻る事が出来た。

「おはよう」

僕が教室に入るや否や、突然教室が静まり返った。

不思議に思いつつも久しぶりの学校だったのでなんだか懐かしい気分浸っていた。

が、どうもみんないつもとは様子が違っていた。

僕は隣の大智を肘で小突いて訊ねた。

「おい、これはどういうことなんだよ？なんでみんな僕の事を避けるんだ？」

何も知らない僕の顔を見て大智は溜息をつきながら話し始めた。

「それは昨日の出来事だった……」

—— 4月9日 ——

「ヤッバア〜！遅刻だあ〜！」

俺、神重大智は通学路を全速力で駆け抜けていた。

「時間は…… 8時25分……」

ここからだ…… 10分で椅子にsit&down出来るぜ！」

ちょっと間違った英語の使い方をしているが、細かい事は気にしない主義だ。

正しく言い直さないまま俺は依然爆走中だった。

数分後……

「BIT……IN！」

教室に勢い良く駆け込んだ俺はその生々しい光景を目撃する事になった……

「つとここまでが第一章で……」

「止めないでいいから……続きを……」

間をおく友人に僕はすばやく突っ込みをいれる。

教室の中は陰湿な空気に包まれていた。

「おい、いったいこれは何なんだ……？」

俺は近くにいた友人Aに訊ねた。

「……返事が無い……ただの屍のようだ……」

ふざけた回答をしたので、本気で友人Aを屍にしそうになったところにそれは来た。

「真面目にやらないとお前も屍にするぞ……」

「……」

「それ以上我が民に手を上げるのはよしなさい！」

その声に俺は聞き覚えがあった。

と言うよりも最近聞いたような気がした。

誰なのか気になった俺は振り返って見ると、そこには……

お前の妹、瑞葉ちゃんがいた。

「……民？」

何故だか不思議な事を口にする瑞葉ちゃんに周りの人々は跪つれまいていた。

「我が君よ……おお、我が君よ……」

教室中でそのような声を耳にした。

「なっ……なんだ？これは……」

『敬つ』と言うよりもむしろ『崇拜』……否、『宗教』化していた。

「瑞葉ちゃん……これは……？」

ようやく話している相手が俺だと気づくと、いつもの口調で話してきた。

「なんだ、大智先輩か！また信者の人が騒動を起こしているのかと思ったよ！」

（信者って……やっぱり宗教かなんかか……？）

頭の中で色々と考えたが、こんなにも大勢の人を従えるにはあまりにも時間が足りなかった。

なぜならば、この現象はまさに今日起こったものだったのだから……それに前日が入学式だったので、瑞葉ちゃんの先輩に当たる俺達のことは何も知らないはずだった。

まあ、例外的に入学式が終わった日の夜にお前の家を訪ねた俺とだけは面識があった。

「なんなんだい？これは……？」

再び瑞葉ちゃんに聞いた。

「これは……学校の中もお兄ちゃんとラブラブになるための作戦。略して『OLD』通称、お兄ちゃんとラブラブ大作戦！」

（そのまんまなんですが……）

口にしようとしたけれども、その行為はこの教室の雰囲気から察するに自殺行為だと捕らえたため止めた。

よくよく見て見ると信仰しているのはクラスの男子諸君だけで、女子の姿は見当たらなかった。

それもそのはず……

彼等はこの良く見れば『可愛い』し、『妹系』で、スタイルも中々よい瑞葉ちゃんを『信仰』と言うよりも『萌え』ていた。

「それに可愛らしくせにこの女王様系というギャップが又良い」と友人Aは述べていた。

まあ、そんな彼等は俗に言う『M』だと俺は認知した。

「……そうか、頑張れ！」

俺はそういつと1時間目の体育のため、校庭へと走っていった。

「つとまあ、こんなもんかな……？」

大智は話し終わるとやり切ったような満面の笑みを浮かべて僕を見ていた。

「そういう時は……妹を止めるよ！」

頭を抱えながらも、大智に言った。

確かにクラスを見て見ると、先ほどから僕を見ているのは男子しかおらず、殺気までも感じられた。

「はあ、これからどうすればいいんだよ……」

幸先不安に感じられて仕方がなかった僕だった。

第3話 瑞葉の……（後書き）

くキャラクター紹介 3く

・千草美鈴

「高貴な家柄だが、実は庶民派などどこか抜けたお嬢様」

生年月日：1991年 7月30日

血液型：AB型

身長：159cm

体重：?kg

趣味：ピアノ・バイオリン・フルートなど音楽系。

特技：3歩歩くと自分に関係ないと思ったことは忘れてしまうこと。

特徴：黒色の肩より長い長髪。（1年前まではセミロングだったが、切らずに伸ばした）

幼げな顔立ちで、大きくて丸い瞳。

好きなタイプの男性：恋愛にはまだ興味を持っていない。

得意科目：ほぼ全部。

苦手科目：これといつては無いが、あげるとしたら体育。

第4話 楽しい部活の勧誘方法！

先日の騒動から2週間、昼休みにちよくちよく僕の教室に顔を見せるようになった妹から逃れるため、最近では昼休みは屋上で過ごす日々が続いていた。

そんなある日の事だった。

いつものように昼休みのマイライフを満喫していた僕に1人の客人が現れた。

「ちよつと、並川君？ いったい何時になったら来るのよ！？」

屋上の隅で大智と話していた僕はその声に頭を後ろに傾けた。

「……………水色……………」

咄嗟に視界に入ったものをそのまま口にすると、その人は顔を真っ赤にしながら弁当箱が入っているだろう巾着袋を僕に向かって投げ飛ばしてきた。

予期せぬ出来事に反応が追いつかず、そのまま顔に当たり倒れた。

「いたたた……………で、何のようだ？ こんな時に」

弁当箱の中身が入っていなかったのが功を奏したのか、軽い打撲だけで済んだ。

「全く……………今日はまあ、私も不注意だったから見逃してあげるわ。それで、話なんだけど……………並川君は何時になったらクラブに来るわけ？」

「ここ2週間顔を見てないんだけど」

そう言えばそうだった。

この2週間はなかなか平和な日常が続いてたせいか、クラブに行くのをすっかり忘れていた。

まあ、初めっから行くつもりなどなかったのだが、そろそろ彼女が来る事だと察知したので今日行こうと思っていたところだった。

「分かった、分かった。今日行くから」

僕の言葉を聞いて安心したのか彼女はすぐにこの場から去っていった。

「そう言えばお前って、料理研究クラブだったんだっけ？」

再び大智と2人つきりになると大智が先に話しかけてきた。

「まあ……仕方なくな……」

よくよく考えて見ると僕がこのクラブに入った理由を大智にはまだ話した事はなかった。

それに大智の顔を見ると、凄く興味津々のような表情を浮かべているので話してやることにした。

それは去年の4月の終わりの頃だった。

クラスにも馴染み始め、大智とは既に深い仲になっていた。

「そう言えば、そろそろ入部受付の締め切りだったかなあ……？
まあ、僕には関係ないけど……」

中学の時は一樣部活動には所属していたものの、高校に入ったら帰宅部に専念しようと強く心に誓いを立てていた。しかし、出会いと言うものは突然起こるものであった。

「わっ！」

家の事を考えながら放課後の教室を出た僕は教室の前を歩いていた人にぶつかってしまった。

「あっ……」

僕は咄嗟に倒れそうになっていたその子の手を掴んだ。

「ごめん。大丈夫？」

その子は掴まれたその手を見て何を思ったのか、顔を赤らめた。

「ええ……大丈夫よ……」

そう言うとその子は掴まれた手を振り解いた。そして、僕に向かって次の言葉を発した。

「あの、時間があつたらちよつと付き合ってくれかな？」

「えっ……まあいいけど……」

僕はそのまま彼女の後について行った。

「なあ、大智……お茶をくれ……話疲れた」

「ちょっと待ってろ……ほい」

「ありがとう」

「んじゃあ、続きを……」

そう大智が促すので、再び話し始めた。

その子に着いていく事約10分。

高校の本舎から離れた別舎のとある部屋の前に着いた。

「ここは……?」

「ようこそ! 料理研究クラブへ!」

「……………はい?」

事の展開について行けない僕には何を言っているのか分からなかった。

しかし、騙されたということだけは理解出来た。

「だ・か・ら、今日から貴方は料理研究クラブの部員って事!

因みに私はこの料理研究クラブの部長を務めている1年B組の柊琴乃^{（この）}。

よろしくね!」

話は逸れるが、うちの学校にはAⅠ組の9クラスある。因みに僕と大智と千草はC組なので、B組とは教室が隣同士であった。

「……………てか、料理研究クラブなんてあったか…………？」

よくよく考えて見ればそうだった。

うちの学校は運動部はもちろんの事、文化部にも力を入れているとは聞いていたが料理研究クラブなんてのは聞いたことがなかった。それ以前に名前にクラブが入っている時点で、部活として成り立っていなかった。

「あるわよ！

今この瞬間、この場を持って料理研究クラブは正式にクラブとして成立したわ！」

確かクラブを運営するに当たって、部員の数最低でも3人はいなくてはいらないはずだ。

しかし、ここにいるのは柊と僕の2人つきりだった。

それに何よりクラブにも顧問が必要であった。

ボーッとしている僕の考えを読み取ったのか、柊は口を開いた。

「いるじゃない！あそこに」

よく見てみると部屋の奥に1人椅子に座ったいる女の子がいた。その女の子は僕の存在に気がつくところこちらに向かって歩いてきた。

「ジーーーー」

僕の顔を直視する女の子。

彼女はいつたい僕の何を見ているのかは知らないが、正直女の子に顔を直視されるのは気恥ずかしいものがある。

「あのおゝ……」

場が悪くなったので、とりあえず話を切り出そうとした。しかし、その彼女は僕の顔を見続けていた。

「……………50点……………」

なにかの点数をはじき出すと彼女は僕から目を背けた。

「彼女は……………」

堪らず、終に助けを求めた。

「ああ、この子は不浄美祢。ふじょうみね

私と同じクラスで、幼馴染なんだ」

と言う事は、この子が3人目の……………いや、順序から言うと2人目の部員らしい。

「皆川東馬と言います。

同じ1年でC組です。

よろしく、不浄さん」

「……………よろしく」

こうして僕は無理やりではあったが、料理研究クラブに入部する羽

目になった。

「大変だったな……お前も」

大智は哀れむように僕を見るが、僕は全く気にしなかった。

「まあな……それこそ始めは大変だったが、次第に馴染んじやつたし……」

今では当たり前の日常生活の一部だもんなあ。

あんまり行つてないけど……

仕方がない。

今日行つてやるか！」

そう言うと同時に休み時間終了のチャイム校内に鳴り響いた。

第4話 楽しい部活の勧誘方法！（後書き）

くキャラクター紹介 4く

・神重大智

「友達思いの義理堅い情報屋」

生年月日：1992年 2月9日

血液型：O型

身長：172cm

体重：63kg

趣味：パソコンを使った情報収集。

特技：町内の人間なら、どの情報でも入手する。

特徴：自慢の茶髪をワックスで立てている。

パソコンを操作する時のみ眼鏡をかけている。（実は普段はコンタクトをしている）

校内では意外と女子からの人気が高い。（案外モテる）

好きなタイプの女性：可愛ければOK。

得意科目：理系教科はほとんど。

苦手科目：家庭科や音楽など。

第5話 嵐の予感？新入部員とパーティータイム 前編

その日の放課後、僕は別舎の料理研究クラブの部室へと足を運んだ。

「遅いわ！並川君。10分も遅刻よ！」

部室に入って早々に叱責を食らった僕は何事もなかったかのように立ち去ろうとしたのを、不浄に捕まってしまった。

「しょうがないだろう、ホームルームHRが長引いたんだから。

そういうのは担任の源ちゃんに言うべきだと僕は主張しますが！」

縄で椅子に縛られた僕は異議を唱えて見るも、速攻で却下された。やはり、2対1では分が悪い。

そこで、このクラブの顧問を探して見るもまだ来ていなかった。

因みにこの料理研究クラブの顧問を務めているのは、1年B組の担任で現代文の教師の高須梨恵子先生である。たかす りえこ

高須先生は20代の若い先生で、この学校のクイーン・オブ・ティーチャーの座に君臨する美人教師のうちの1人だった。

実年齢は分かっていないが、まだ未婚であることは確かな情報である。

それゆえの料理研究クラブか……

と僕は勝手ながら推測していた。

「で、今日は何をするんだよ？いつものようだったら帰るぞ？」

話の筋を戻し、今日ここの召集された理由を問いただした。

「もちろん、新入生の歓迎会の準備に決まってるじゃない！」

聞かされていませんが……………？

そう思うのは気のせいであろうか、なぜか円滑に話が進められていた。

その時だった。

ガラガラ……………

ようやく高須先生が到着した。

僕はすぐさまに高須先生に訴えかけた。

「先生、柊さんが僕を拘束します！」

すると、状況を理解した高須先生は柊と不浄に向かって言った。

「あらあら、いけませんよ。拘束なんてしちゃあ。やるならもっときつくやらないと……………」

若干話に変な流れに進んだが、いつもの事なのでスルーした。それに対して柊等は僕を睨みつけながら言った。

「先生、誤解しているようですが私達はこの不良に走りそうになっている並川君を止めるために拘束しているのです。」

その意見に納得した先生は柊派に取り込まれてしまった。まあ、始めから期待はしていなかったものであったが。

「……………」と言う事で明日が本番だから、それまでに料理を作ること！いいわね？並川君」

小1時間ほど話した後、にそれだけが僕に伝えられた。

てか、僕だけ仲間はずれって……

そう思ったが、まああまり来ていなかった始末がこれだけならまだ許せたのだった……

「……料理作るの？まあ、頑張つてね」

僕は柊に激励の言葉を送るとようやく解けた縄をゴミ箱に捨てて、帰ろうとした。

「へ……？料理つて、並川君が作るんだよ？」

理解速度が遅れたせいか、拍子の抜けた声で柊は答えた。

「は……？なんで僕が料理なんて作んなきゃならないんだよ？大体、一番料理と無縁だろうが！」

僕は食べる事はあっても、作る事なんて滅多にしない。

「だって、それはいつも部活にこないからじゃない！

まあ、いい罰だと思って頑張rinaさい！」

その言葉だけ残すと柊と不浄は無情にも帰ってしまった。
残されたのは僕と高須先生だけだった。

「あつ、そういえばまだ仕事……」

なんて事を言いながら高須先生も去っていつてしまった。
さて、どうしたものか……

作るものなんか考えていなかったなので、その辺にある料理本を片手

にレシピを考え始めた。

実を言うと、先ほどの言葉は半分嘘だった。

確かに僕は食べる方がメインだけれども、家での夕食は大抵僕が作っていた。

「この時間じゃあ、家に帰るのは遅くなるな……
瑞葉にメールでもしてやらないと」

僕は妹に遅くなるとメールを送ると、明日の準備に取り掛かった。

第6話 嵐の予感？ 新入部員とパーティータイム 〳後編〵

「……………ここは……………？」

気がついてみれば窓から朝日が差し込んでいた。

「そう言えば昨日は学校に泊まったんだっけ……………」

曖昧な記憶を辿りながらも、昨晚の出来事を懸命に思い返した。

終等がいなくなってから既に2時間が経っていた。

外は夕日が今にも落ちようとしていて、肌寒い空気が部室の中を駆け抜けた。

おおよそのレシピが出来上がった僕は、調理室に移動しようとした時だった。

「……………？」

なぜか部室を出ると妙な感覚に陥った。

この感覚を以前にも感じた事があったのだが、それがいつの事だったのかは明確には覚えてはいなかった。

まあ、覚えていないのでたいしたことではないと考えた僕はそのまま職員室へと足を運んだ。

「失礼します。並川ですけど、高須先生はいますか？」

調理室を借りるには先生の許可が必要だったので、ここに来たので

あつたが……

「高須先生なら帰ったぞ」

この感覚……

奥から聞こえたその声の主は、やはり源ちゃんだった。

「そうですか……なら、調理室の貸し出し許可を貰いたいんですけど……」

理由を述べることに10分……

理解度が低い……いや、頭の堅い源ちゃんには少々理解しがたい理由だったのだろう……

確かに『こんな事を1人に押し付けるなんて考えられない』という源ちゃんの言葉は納得だったが、そんな事を僕が柊等に言ったら何をされるか分かったものではなかったもので、渋々受け入れてしまった次第だった。

ようやく調理室の貸し出しが認められ、鍵を借りた僕は下準備のためそのまま外へと向かった。

「まだ商店街はあいてるかなあ？」

そんな事を言いつつ、学校から借りた自転車で軽快に走っていた。

1時間後……

一通り買い物を終えると、一旦家へと戻る事にした。

少し持ってくる物もあったのだが、大半の理由は夕飯を作つてやらないと、瑞葉は本日絶食になってしまうからであった。

それはいくらなんでも可愛そうに思ったので仕方なく家路へと急いだ。

「ただいま」

ドアをあけるとほぼ同時にバックステップを踏み、その場を離れた。

「お帰り〜お兄ちゃん」

ドアが開くと同時に瑞葉は飛び掛ってきたが、それを長年の感覚で華麗にかわした。

「も〜、抱きつくぐらい良いじゃん!」

上手く着地はしたものの、避けられてご機嫌ななめな瑞葉をスルーして、早速料理に取り掛かった。

20分後、テーブルには美味しそうな料理が並んでいた。

「わ〜! いったきま〜す」

『我ながら良い出来映えだ』と自画自賛しつつも、学校に戻る用意をまとめていた。

「じゃあ、行つて来るから後は頼んだぞ〜」

そう言い残すと再び学校へと向かった。
すぐさま調理室に行くと準備を整えた。

「よし! やるか!」

そう言つて始めたわけではあったが……

「途中で力尽きたのか……」

僕は自分の体力のなさに落胆した。
クッキーは型をとって冷蔵庫に冷やしており、ケーキもスポンジは焼き終わっていた。

これを見る限りでは充分完成しているのだが、部室の黒板には終等が食べたいものまで書き込んであった。
まだそれを作っていなかったので焦っている始末であった。

「全く無茶な要求を……」

黒板には『特大プリン＆パフェ!』と書き込んであった。
パフェならまだしも、プリンを作るなんて面倒なことであった。

「仕方ない……やるか……」

5時間後……

汗水垂らしながらもようやく完成した特大プリンに多少ながらも感動していた。

「はぁ、はぁ、はぁ……全く……人の休日……なんだと思っ
てるんだ……!」

このとき既に僕の体力は限界を迎えていた。
土曜の朝7時から5時間の労働を強いられ、時刻は既に12時をやや回ったときであった。

「並川君、できたあ〜?」

威勢のいい声で勢い良く調理室のドアを開けたのは、なにを隠そう柊である。

「まあ、なんとか……」

出来上がった料理が調理室の机の上に並べられているのを見て、柊は頷きながらクッキーに手を伸ばした。それを全力で阻止する僕に向かって柊は不適されたような顔を向けた。

「少しぐらい良いじゃん！」

「ダメです。これは新人生のために作った物だから、パーティーまで待ってなさい！」

子を叱る親のセリフのように僕は柊に言った。

「……分かったわよ」

柊はそう言つと料理を部室へと運び出した。僕もそれに習つて部室へと付いていく。すると、部室は大変な事になっていた。

「なつ、なんだ？これは……」

部室に入った僕はいつもとはまるで違う代わり映えした部室に啞然としていた。

紙で作った飾りが部屋を1周していて、黒板にも色々書き込んであった。

「こんな事をしていたのか……」

昨晚感じた感覚は、僕が部室を出るのを待っていた柊等の視線であったのだ。

「まあ、並川君も頑張っていたから、私達もやろうかなって思っただけで……」

柊はそう言いながら下を向いていると、今度は不浄が近づいてきた。

「……お疲れ様……」

不浄は手に持っていたお絞りを僕に渡してきた。

「ああ、ありがとう。不浄さん」

そのお絞りで顔を拭くと、僕は席に着いた。

「じゃあ、新入生を呼んでくるわね」

いつの間にいたのか、高須先生はそう言いつつ走っていった。
5分後……

「じゃあ、入って。遠慮しなくていいわよ」

高須先生は2人の女の子を部室の中へと招き入れた。

「空いてる席に座って」

高須先生にそう言われると彼女等は僕の隣の席にそれぞれ腰を下ろ

した。

「では、始めに柊さん。お願いします」

会の進行を部長に委ねると先生も席に着いた。

「では始めに、新入生みなさん。料理研究クラブにようこそ！

私はこのクラブの部長を勤めさせていただいている、2年B組の柊琴乃です。

これから2年間、よろしくね。

では続いて……」

柊から自己紹介が始まり、なぜか知らないけど最後に僕の番が回ってきた。

『何か面白い事をやらないといけないのか……？』とか思いつつも、普通に話して終えた僕に柊から『空気読めよ』みたいな視線を送られたが、そこはあえてのスルーで済ませた。

そして1年生の番になった。

始めは僕の右隣にいた子からだった。

「始めまして。1年D組の成瀬優なるせゆうです。
趣味は料理作りと音楽鑑賞です。よろしくお願いします」

丁寧に清楚なお嬢様系の雰囲気を出していた成瀬は挨拶を済ませると静かに席に着いた。

「ええ」と、同じく1年D組の若嶋紗枝わかしま さえです。
趣味は、野球観戦です。よろしくお願いします」

ややスポーティーな若嶋が成瀬の右隣に座ると柊が立ち上がった。

「では、一通り自己紹介も終わったところで……
みんなグラスを持って行くよ」

僕は自分のと成瀬と若嶋に飲み物を注ぎ、不浄にペットボトルを渡した。

準備の言い奴らだと思いながらも、グラスを持ち上げた。

「じゃあ、成瀬さんと若嶋さんの入部を祝して……かんぱい！」

その言葉と共に楽しい宴が始まった。

A・S・M - 1 - お兄ちゃん観察日記♪（前書き）

略語を使い、申し訳ありません。

『A・S・M』とは『Another Story MIZUHA』の略です。

因みに日本語訳的には『番外編』と取っていただと分かりやすいかと……

今回ののは瑞葉視点ですが、今後は様々な人物の視点で書きたいと思っていますので、どうかよろしくお願いします。

高校生になってはや半月。

私、並川瑞葉は今日も昼休みをお兄ちゃんと過ごすべく4時間目の終了を告げるチャイムが鳴ると同時に教室を飛び出した。

私たち1年の教室は4階建ての校舎の3階部分にあり、お兄ちゃん等2年の教室は4階にある。

私のクラスはD組で、フロアの真ん中にあり両側（うしろ側）にある階段からは一番離れたところだった。

お兄ちゃんの教室はC組だからこの位置はすごく不都合ではあったものの、ものの1分で着くのであまり気にしていなかった。

「おにーちゃん？」

2Cの教室のドアから顔を出しながらお兄ちゃんを呼ぶものの返事が無かった。

と、そこへ見た事のある人物が近づいてきた。

「あら、瑞葉ちゃん。こんにちは」

確か、入学式の次の日に来た……

「……南先輩？」

「違うわよ。千草よ、千草美鈴！」

ああ、確かにそんな名前をしたお兄ちゃんを惑わせる忌々しき悪魔がいたような、いないような……

「あつ、そう！お兄ちゃんいませんか？」

教室を見渡しても姿が確認できなかった。

「えっ……並川君ならさつき走ってどこかに行っちゃったわよ」

それを聞くと仕方なく私は教室に戻る事にした。

入学して2週間、毎日毎日昼休みは2Cに来ていたが、一緒にご飯を食べたのは最初の2回だけだった。

それにまだこの校舎の構造が良く分かっていなかった私では、1年のアドバンテージがあるお兄ちゃんには勝てなかった。

「あゝあ、今日も食べられなかった……」

昼休みに入ってまだ5分しか経っていなかったので、ちょうど今授業が終わったクラスもあった。

教室に戻ると私の席にこの2週間で出来た友達が来ていた。

「おかえり〜！お昼一緒に食べよう」

彼女たちは近くの椅子を持ってきて、お弁当を私の机の上に広げていた。

「優ちゃん、紗枝ちゃんの今日のお弁当はな〜に？」

私とは違って料理が上手な優ちゃんと紗枝ちゃんは自分でお弁当を作っているらしい。

私のお兄ちゃんの手作りなので文句なんて一切ないのではあったが、それでも女の子が作るお弁当には興味があった。

そう言えば以前、お兄ちゃんに一度だけお弁当を作ってあげたのだ

つたが、家に忘れて食べてもらえなかった事があった。

お兄ちゃんが家に帰ってから食べさせたのだったが、さすがに痛んでいたのかその後お兄ちゃんは失神しながら呻いていた。

それ以降一切台所に立たせてもらえず、やらせてもらえる料理としてはトーストを焼く位の物だった。

果たしてそれが料理に入るのかどうかは分からないが、お兄ちゃんの作る料理は絶品なので私が作る必要がないわけであった。

「ふふふ……今日はオムライスを作って見たの〜」

優ちゃんはそう言いながらお弁当箱の蓋を開けると、そこには薄焼き玉子の上にハートのマークが書かれたオムライスがあった。

「うわ〜、おいしそ〜!」

少し型が崩れてはいた物の、とても美味しそうだった。

「私のはこれだよ」

今度は紗枝ちゃんがお弁当箱を開けた。

中にはタコさんウィンナーを筆頭に様々な動物さんシリーズが並んでいた。

「か、可愛い〜」

食べるにはもったいないくらい動物さんたちは可愛かった。

「瑞葉ちゃんのお弁当は〜?」

優ちゃんがわくわくした表情を浮かべながら私を見ていた。

「今日は……」

お兄ちゃんが作っているので中身を知らない私は、このときが一番
楽しみであつた。

「じゃあ〜ん！エビチリに青椒肉絲だよ」
チンジャオオロース

いつもより若干豪華なお弁当に自分でもビックリしていた。

「わ〜！朝から中華料理を作るなんて……瑞葉ちゃんすごいよ〜！」
実を言うと、彼女等にはお弁当は自分で作っていると書いていたの
であつた。

「ま……まあね♪今日はちょっと時間があつたから張り切っちゃつ
た♪」

張り切つただけじゃ済まされなさそうだったが、紗枝ちゃんがタイ
ミングよく話を逸らせてくれた。

「そういえばさあ〜、瑞葉ちゃんは今部活動決めた？」

気がつくともう4月の終わり。

そろそろ提出の期限だったが、私は既に決めてあつた。

「うん。私、中学校からテニスやってるから高校でもやるのかなあ
〜ってね」

中学ではそこその実力だったと私自身でも思っていた。

「そうなんだあゝ。私はどこにしようかなあゝ？」

おしとやかな優ちゃんに似合うのはやはり文化系の部活だろう。

「じゃあ、今日一緒に回って見ない？」

一見運動部だったように見える紗枝ちゃんも実は中学時代は文芸部だったと言っのだから驚きである。

「そうだね。じゃあ、行こうか」

そんな話をしているうちに昼休みが終わってしまった。

その後、淡々とした日々を送っていた。

そして金曜日……

「帰り遅くなるから、夕飯待って！」

仮入部した部活が終わり、自宅に帰っていた私のケータイにお兄ちゃんからメールが届いた。

「ええゝ！なんで？お兄ちゃん、帰宅部じゃなかったっけ？」

すぐさま返信するも、その後メールの返事が返ってくることは無かった。

やる事が無く、リビングでテレビを見てると外で物音が聞こえた。

「この足音は……」

私はすぐに玄関に行くと、5秒後にドアが開いた。

「お帰り〜♪お兄ちゃん」

いつものようにお兄ちゃんに飛びつこうとしたが、なぜか今日に限っては事前に察知されていたらしく、避けられてしまった。

「も〜、抱きつくぐらい良いじゃん!」

私の言葉をよそにお兄ちゃんはなにやら急いでいるようだった。

それを察した私は猛スピードで料理を作るお兄ちゃんには手を出さずに再びテレビを見る事にした。

20分後……

私の為に作られた料理の数々に私は目を奪われていた。

「わ〜! いったきま〜す♪」

お兄ちゃんが作る料理はいつも美味しいが、今日のは絶品だった。

「おいし〜♪」

黙々と食べる私にお兄ちゃんは何か言っていたが、今の私の耳には入ってこなかった。

そして、食べ終わってから私は気づいた。

「美味しかった〜♪ねっ、お兄ちゃん。……お兄ちゃん?」

既にお兄ちゃんの姿は見えなかった。

「も〜!」

再び1人になった私はその後早めに寢床に着いた。

そして、月曜日……

いつも通り4時間目が終わり、2Cに走っていた時であった。階段を駆け上がったしていると、目の前にお兄ちゃんの姿を発見した。名前を呼びたい気持ちを抑えて、お兄ちゃんの後を尾行してみるとA組の後ろ側のドアの辺りでお兄ちゃんはキョロキョロと不自然な行動を取っていた。

（まさか、可愛い子をさがしてるんじゃないか……）

そんな事を思っていたのだったが、どうやら違ったようだ。お兄ちゃんはA組のドアとは逆の方を向きドアを開けた。

（確かあのドアは、学校を回ったときに空けちゃいけないと言われていた様な……）

しかし、実際にお兄ちゃんはそのドアを開けていたのだから害があるものではないだろう。

私はお兄ちゃんの姿が見えなくなると、そのドアを開けた。するとそこは外だった。

明確に言くと、屋上に繋がるバルコニーのようなところだった。

「なるほどね……」

私はどうしてお兄ちゃんの姿を見つける事が出来なかったのか、今理解した。

「まあ、今日のところはこの位で……ふふふ……」

呟きながら私は教室に戻った。

教室では既に優ちゃんと紗枝ちゃんがお弁当箱を広げていた。

「ごめん。遅くなっちゃった」

私が席に着くと、2人は互いに見詰め合ってから頷き私に話しかけた。

「あのさ、瑞葉ちゃんって兄弟いる？」

突然の質問に意味が分からなかったが、一様答えておいた。

「いるけど……なんで？」

その答えを聞き、再び2人は見詰め合い頷く。

「もしかして……もしかすると、兄弟って東馬先輩？」

「えっ……？なんで知ってるの……？」

予想外の答えに私は啞然とした。

まだ彼女等には話したことはなかったのではあったが……

「やつぱり。けど、東馬先輩ってちょっとカッコいいよね」

これまた優ちゃんの予想外の告白に衝撃を受けた。

「まあ、カッコいいかは分からないけど、料理は上手だよね！」

はたまた何故紗枝ちゃんがお兄ちゃんの料理の腕を知っているのか、私は耐えかねて2人に訊ねた。

「2人はなんでお兄ちゃんを知っているの？」

話す事10分……

このときようやくお兄ちゃんが部活動に所属していたことを知った私であった。

第7話 テストでトウナイト！ ～前編～

ピンチである。

今まで歩んできた人生のうち、一番のピンチを迎えていた。

何故今まで気がつかなかったのか……

それを後悔しつつ、僕は机に向かった。

思い起こせば3週間前の事である。

「おーい、東馬。今暇か？」

5月に入り、1週間が過ぎたある日の出来事だった。

妹に昼休みに潜伏していた場所を発見され、料理研究クラブの部屋に場所を変えていた時のことだった。

「なんだよ？今忙しいんだけど……」

1人で食後の冷えたプリンを食べようとし、冷蔵庫に手をかけていた僕は、大智の声に顔だけをそちらに向けた。

「大ニユースだよ！大ニユース！」

大智は手に握っていたチラシを僕の顔の前で広げた。

「うわっ！邪魔だよ。見えねーから！」

冷蔵庫から手を離し、僕は、大智の手からチラシを取った。

「……………なんだよ？これ……………」

そのチラシに書いてあったものは、僕が予想していた物とは異なっていた。

「何って……………バイトに決まってるだろ」

「意味が分からん……………」

話の意図が読めず、僕は再び至福の為に冷蔵庫に手を伸ばしていた。

「だ・か・ら！バイトだよ、バ・イ・ト！

働いて見たいって以前言ってたじゃないか！」

そう言えばそんな事も言ったような……………

しかし、それがいつ言った事なのかはまるで記憶に無かった。

「確かに言ってたかも知れないけど……………」

今は部活もあるし、それに今月末はテストだってあるじゃないか！
バイトなんて到底無理だよ」

僕は折角の大智の努力を無駄にしたいくは無かったのだが、現在の状況でバイトをするには無理があつた。

「けど東馬さー、欲しい物があるって言ってたよね？」

「うぐっ……………」

心底大智の情報網と記憶力の良さには舌を巻いていた。

「まあ、欲しいけど……」

「そうだよな、欲しいよな！じゃあバイトを……」

無理にでもバイトをさせたがる大智に不信感を抱いた僕は、大智に理由を尋ねてみた。

「何でそこまでバイトにこだわるんだよ？」

「ふふふ……それはだな……」

なにやら不気味な笑みを浮かべながら僕に近づいてきた。

「そ、それは……？」

妙なプレッシャーに息を呑む僕。

「それは……バイト先に可愛い女の子がいるんだもん」

僕は、大智の不純な理由に頭を抱えながら、冷蔵庫の中を空けた。するとそこには……

『プリン作ってくれたんだあゝ。ありがとう b y 柊』

と書かれた紙だけが残されていた。

「うう……大智……」

「なんだ？東馬」

僕は大事な娘を嫁に持っていかれた父親のように泣き、大智に言った。

「やるぞ……もう、やってやるゝ！」

こうして僕はバイトを始める事を決意した。

「こんなことになるなんて……」

現時刻は深夜1時。

忘れ去られていたテストまで残り1日とちよつとだった。

「うわあゝ、大智のバカやるゝ！」

泣き叫びながら必死になって手を動かす僕をよそに他の皆は眠りこいていた。

こうなつた経緯^{いきさつ}は2日前のことであつた。

「東馬、今度の土日は暇か？」

バイトを始めて早2週間。

バイト先の雰囲気にも馴染み始め、仕事も手馴れてきていた。

「ん？今度の土日はバイトが……」

僕は携帯のスケジュールを開こうとした時だった。

「お前余裕だな？テスト前にバイト入れるなんて」

その時僕は一瞬大智が何を言っているのか分からなくなった。

「テスト前……？テストって……ハッ！」

気がつけば既にテスト直前の金曜日になっていた。

うちのテストは基本的に月曜日から始まり、4日間の死闘を広げる。よって、その直前の土日をどう過ごすかによって勝敗が左右されるのであった。

「うっう……忘れてた……」

すっかり頭から離れていた僕に大智は同情したのか、バイト先の店長に連絡をいれてくれて、なんとか土日は行かずに済む方向に話がまとまった。

「悪いな、大智。助かった」

僕は大きに何かお礼がしたかった。
まさかそれに付け込んでくるとは思いもしていなかった。

「じゃあ、今度の土日はお前んちで勉強合宿ってことで……」

「うっ……」

確かに大智には感謝をして御礼をしたいとは思ってはいたが、ここまでとは思っても無かった。

しかし、ここで断る事も出来なかったので僕は渋々了承した有様だ

った。

そして次の日……

——ピンポーン——

現時刻は午前8時。

いつもなら寝ていた時刻であつたのだが、昨日大智が『8時に行く』
と言っていたので僕も眠たい体に鞭を打って部屋を片付けていた。

「はいはい……今あけますよ……」

僕は独り言を言いながら、玄関のドアを開けた。
するとそこには大智と他3名がいた。

「ち、千草さん……それに……」

千草の後ろで親指を立てて笑っている大智に僕は心の中でガッツポ
ーズをとる。

「……なんで柊と不浄がいるんだよ？」

何故だかは分からないが、千草の後ろに柊と不浄が立っていた。

「私が誘つたの。なんか最近うちの教室にいる事が多いから、友達
になっちゃったの」

よりによってこいつ等とは……

そんな心の声が聞こえたのか、柊は僕の顔を睨んで来た。

「ま、まあ、立ち話もなんだしあがってよ」

この日僕は何か不吉な予感がしてならなかった。

第8話 テストでトウナイト！ ～後編～

リビングでやるにはテレビがあり、邪魔だと思った僕はとりあえず自分の部屋へと案内をした。

「結構片付いてるわね」

僕の部屋に初めて入った柊は部屋に入るや否やそう言った。

「まあね。きちんと管理してないと妹が……」

そんな事を言いながら本棚から教科書を取り出そうとしたら、なぜか下の段の本の配置が変わっていたのに気づいた。

「はあ……またか……」

重いため息をつきながらまた瑞葉が僕に無断で部屋に入った事を知り、シヨックを受けた。

『そろそろ防犯対策でもしないといけないな……』と思いながら床に座った。

「そう言えば東馬。例のあれは手に入ったのか？」

突如話題を振ってきた大智は期待した目で僕を見てきた。

「ま、まあ……一様友達だからな」

そう言いつつ鞆からノートを一冊取り出した。

「おお！悪いな、サンキュー」

この不自然な会話に理解できない柊は首を出してきた。

「ちょっと、何の話？」

「いや……別に大したことじゃ……」

慌てて誤魔化す僕を柊は軽蔑したような目で僕を見る。

「お前が考えてるような疾しいことじゃねーよ」

僕はそう言つと大智からノートをひたたくつて柊に見せた。
何を躊躇っているのか柊は若干間を空けた後に、そのノートを開いた。

「……なんだ、ただのイラストじゃない」

柊はそう言つとノートを大智に返した。

「じゃあ、そろそろ始めましょうか？」

今日の頼みの綱である千草はそう切り出して勉強会が始まった。
1時間後……

「——がこうだから——それとこれを合わせて——」

千草が説明しているのだが、さっぱり理解できない僕は集中力が途切れかかっていた。

「ダメだ……さっぱり分らない……」

しかし、僕以外の人は何かを掴んだのかスラスラと問題を解いていく。

まあ、始めから理科と数学は苦手だったから学校の授業さえ禄ろくに聞
いてはいなかったが、ここに来て支障が出るとは思っても見なかつ
た。

「……大丈夫？並川君」

僕の理解度に気づいた千草は心配した表情で見つめてきた。

「……いや、全然ダメだ……ちょっと頭冷やしてくるわ」

そう言っ僕が席を立ったときだった。

——ピンポン——

「……誰だ？ちよつと瑞葉、出てくれ」

隣の部屋の瑞葉を呼びかけるも、返事は無かった。

——ピンポン、ピンポン——

「全く……今行きます！」

僕は急いで1階に駆け下り、玄関のドアを開けた。
するとそこにいたのは……

「やつほ」瑞葉ちゃん……って並川先輩！？」

これまた部員の成瀬と若嶋であった。

「なっ、なんでお前等がここに……?」

『そう言えば瑞葉もD組だったっけ……?』

ふとそんな事に気がついて成瀬と若嶋が家に来たことに1人で納得していた。

「そうか！瑞葉と一緒にのクラスだったのか。まあ、あがれよ」

僕は2人をリビングに招いた。

「そっいえば、瑞葉ちゃんは？」

「たぶん部屋にいると思うけど……呼んでくる？」

僕は若嶋の言葉に今日まだ1度も顔を見ていない瑞葉のことが少し気になった。

「いえ、一緒に行きます」

若嶋がそう言うと、2人は僕の後について瑞葉の部屋の前に行った。

「瑞葉……起きてるのか？」

ドアを叩きながら問いかけるが、一向に返事が無い。

「成瀬と若嶋が来てるけど、どうするんだ？」

そんな事を言っていると、急に瑞葉の部屋のドアが開いた。

「おはよ……お兄ちゃん……」

瑞葉は顔が赤っぽく、大量の汗を掻いていた。

「お前、大丈夫か？熱あるんじゃないのか？」

僕はそう言つと、瑞葉をお姫様だっこしてベッドに戻した。

「ははは……こんな事されるの久しぶりだね」

「いいから、ちょっと寝てろ」

僕は急いでタオルを持ってこようと部屋を出ようとしたとき、成瀬と若嶋の表情に気づいた。

「悪いな……瑞葉はあんなだから今日は休ませてやってくれないか？」

2人は頷いて瑞葉に一言いつて帰ろうとした時であった。

「ちよつと、並川君。飲み物欲しいんだけど……」

つて優と紗枝じゃない！何してるの？こんなところで……」

僕は突然僕の部屋から顔を出してきた柊に事情を話した。

「……なら一緒にやればいいじゃない！」

その一言でこの問題が片付いてしまったのだから、柊の発言力は凄

い物だと感心しながら僕はリビングに降りた。

まず先に柊等が待つ部屋に飲み物を届けた後、僕は洗面器に水と氷とタオルを入れて再び瑞葉の部屋に戻った。

「大丈夫か？あんまり無理すんなよ……」

僕が戻った時はまだ瑞葉は起きていたが、1時間位看病をしていると静かに寝込んだ。

『おとなしくしていれば可愛いのかな……』なんて思いながら、僕も部屋に戻る事にした。

「ちよつと、並川君！遅いよ」

なぜか僕の部屋は勉強そっちのけで不可思議なイベントが発生していた。

しかも、女子だけで……

「東馬、なんで俺だけ……」

仲間はずれにされていた大智は僕の登場に涙目で僕を見てきた。

『1、仕方なく大智の面倒を見る。』

2、柊等の摩訶不思議なイベントに参加する。

3、1人で勉強を始める。』

3つの選択肢が思い浮かんだが、僕は速攻で1を消去した。

まあ、大智の面倒を見るなんてめんどくさいことはしたくなかったからだ。

残る2つの選択肢から考え抜いた結果……

「……僕も混ぜてくれ！」

その後、僕等は気が済むまで遊んだ。

そんな事があり、今の時間に至っていた。

まあ、途中で何度か現実世界に戻れる機会があったのだが、悉く柊等のペースに吞まれてしまった。

僕はイベントの最中も、少し時間を取って偶に瑞葉の様子を見に行つてたが、瑞葉は落ち着いて眠りについてた。

そんなこんなで、結局晩御飯は僕が作る羽目になるし、なぜか罰ゲームでは僕ばかりで、雑用を色々と押し付けられ続け、ようやく僕は現実世界に戻ってこれた。

「ふふふ……女の子がいつぱい」

怪しい寝言を言っている大智を縄で縛ると、リビングに捨てた。

そして、部屋で寝ている5人にタオルケットをかけると、僕も教材を持って部屋を後にした。

起きたときに何を言われるかは大体想像がついたからである。

「さてと、下に行つて続きでもするか……」

僕が廊下を歩いていると、隣の瑞葉の部屋のドアが開いた。

「お兄ちゃん？」

眠たげな臉を擦りながら、瑞葉は部屋から出てきた。

「もう大丈夫なのか？熱はどうだ？」

僕は瑞葉の額に右手を当て、同様に自分の額にも左手を当てる。

「熱は下がったようだな。もう遅いから寝なさい」

僕は瑞葉をベッドに連れ戻すと、突然瑞葉が言った。

「ねえ、お兄ちゃん。昔みたいに本読んでよ」

何を言い出すかと思ったら、瑞葉は子供みたいに頼んできた。

「お願い……」

「……分かったよ。けど、読み終わったら寝るんだぞ」

瑞葉はその言葉に頷いたので、僕は瑞葉の部屋にあった本を取り出して読み始めた。

僕は小さい頃瑞葉に読んだ本をもう1度読む。
すると瑞葉が口を開いた。

「懐かしいね、あの頃……いつも2人一緒だったし、お兄ちゃんは私に優しくかったし……」

その頃からだったかな……私がお兄ちゃんを好きになり始めたのは……」

瑞葉の言葉に僕は一瞬胸が高まった。

「もちろん今のお兄ちゃんも好きだけど……昔とは少し変わったかな。」

昔のお兄ちゃんはもっとやるべき事が分かっていたというか、なん

か夢に向かつてる目をしていたの……

けど、今のお兄ちゃんは漠然と日常を過ごしてる……

私は、お兄ちゃんにはもつと夢を見ていて欲しいな……

私の好きなお兄ちゃんであるように……」

「瑞葉……」

初めて瑞葉の心が分かった。

今までは将来のことも考えてなかったし、ただその日が楽しければ良いと思っていた。

自分さえ楽しければ良いと思っていた。

他人のことなんかこれっぽっちも考えてなかった。

まさかこんなにも近くに僕の事を思ってくれている人がいたなんて気づかなかった。

「僕は……僕は……」

流れ溢れてきそうな涙を堪え、瑞葉を見る。

すると瑞葉は安心したのか、心地よく眠りについていった。

「瑞葉……ありがとう……」

僕はそう言い残すと瑞葉の部屋を後にした。

そして、将来のためにも夢のためにも僕は1人静かに勉強を続けた。

第9話 罰ゲームと戦いの幕開けと……

テストも終わり、6月に入ってから降り続いた雨も今日に限っては止んでいた。

長い休暇を取っていた太陽も働き始め、心地よい風が吹き抜ける中で1人、陰湿な空気を纏っていた。

「はあ……」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

さっきからずっとため息ばかりついて」

朝食に箸が進んでないのに気づいたのか、瑞葉が話しかけてきた。

「なあ、瑞葉。僕は思っんだ……」

こんなにも清々しい休日があると言っのに……」

話が理解できない瑞葉は耐えかねて口を挟もうとしたが、僕はそのまま話続けた。

「なんでこんな日に罰ゲームなんだよぉー！」

それを言うと同時に玄関のチャイムが鳴った。

——ピンポン——

「はあーい」

話が聞き飽きた瑞葉は玄関に向かい、ドアを開けた。

すると、そこには見知らぬ女の子がいた。

「おはようございます。東馬さんはいらっしゃいますか？」

その子は礼儀正しく瑞葉に問いかけてきた。

「ええ」と、どちら様でしょうか？」

見た目からして年下なことには違わないが、相手の態度につられて瑞葉も敬語を使っていた。

「あつ、申し遅れました。私、かみしげ めぐみ神重恵美と申します。いつも兄様がお世話になっております。」

（神重……？兄様……？）

頭を抱えている瑞葉の奥で、自室に戻ろうとした僕の姿を見つけた恵美は僕の事を呼んだ。

「ちょっと早く来すぎちゃった。居間で待っててもいい？」

なんでだろうか……？瑞葉に対しては敬語なのに、僕に対してはため口なのは……？

そうこう考えているうちに時間が経ってしまうものもったいないので、適当に返事をしておいた。

「ああ、好きにしてくれ」

その言葉を残すと、僕は自室へと駆けていった。

全く、どうしてこんなことになってしまったのだろうか……？
思い起こせば、テストが終わった3日後の事だった……

何時になく速攻でテストが全て返却され、その日の放課後に忌々しきテスト結果が発表された。

「おう、東馬どうだった？」

成績表を受け取り、席に着くや否やに大智が言い寄ってきた。

「まあまあかな。大智はどうだった？」

僕は大きに成績表を渡しながら訊ねると、不気味な笑みを浮かべながら無言で成績表を渡してきた。

「……なっ、なんだ？これは……」

そこに並んでいた成績の順位は一桁の数字が並んでいた。

「がっ、学年8位だと……」

2年にあがるまでは僕と五十歩百歩の戦いを繰り広げていたのに、この歴然とした差に驚いていた。

「フッフ……どうやら今回は俺の勝ちのようだな。

では、この間の約束を果たしてもらおうことにしよう……」

「約束……？」

身に覚えの無い言葉に不思議がっていると、見兼ねた大智は僕に言

った。

「おいおい、忘れたとは言わせないぞ！
テスト直前の日曜日に『明日のテストで負けた方が罰ゲーム』って
約束しただろ」

そう言えばそんな事あったような無かったような……

「つと言っわけで、今から家に来いよ」

男に二言はないので仕方なく僕は太智の家に行った。

「まあ、上がれよ。恵美く帰ったぞ」

その声が聞こえた途端に奥から恵美が走ってきた。

「あつ、お兄ちゃんおかえりなさい。それに東馬さん、お久しぶり
です」

恵美は僕に微笑みかけた。

僕が1年の時に1度太智の家に遊びに行ったときに知り合った。

「こんにちは、恵美ちゃん。大きくなったね。今年でもう中3かあ
く！」

「そんな、あんまり見つめないでくださいよ」。

それは1年も経つんですもの、胸くらい大きくなりますよ」。

まあ、東馬さんになら……」

ちよつと語弊がある言い方だったらしく、誤解したまま話が進んで

いた。

「まあ、なんだ話の途中で悪いんだが今回の罰ゲームなんだが……」

僕は何故大智が言葉を濁すのか分からなかった。

「東馬さん、今度の日曜日に私とデートしてくれない？」

「……えッ？」

2人が言っていることが理解できない僕に大智はため息をつきながら、僕に分かるように言った。

「だから、今回の罰ゲームは恵美とデートして欲しいんだよ」

「東馬さん、私じゃダメですか？」

うつすら涙目の恵美に心が痛まれ、僕はイエスとしか返事をさせてもらえなかった。

「では、日曜日の朝に東馬さんの自宅まで行きますから」

そう言われると僕は1人で自宅へ帰った。

「ちょっと、お兄ちゃん！どういうことなの？」

私と言う女がいるのに、他の女とデートだなんて……」

もつどこから突っ込めばいいのか分からなかったのでスルーした。

「仕方ないだろ、罰ゲームなんだから……
出来れば僕もこんなことはしたくなかったよ……」

僕は仕度を済ませると、1階に降りた。

「あつ、終わったの？じゃあ、行こう」

恵美は僕の腕に手を回して、家を出ようとした。

「ちょっと、恵美ちゃん。靴履けないんだけど……」

「ハハハ……ごめんね」

僕が靴を履くと、何時の間にか玄關にいた瑞葉と目が合った。

「じゃあ、留守番頼んだぞ。ご飯はどこかで買って食べてきて言いから」

「いつてらっしゃい……フフフ……」

気味の悪い笑い声にいやな感じがしたが、そんな事を気にしてはいけなと僕は思い直して家を後にした。

一刻も早く休日を取り返さなくては……

そのことだけを考えていたので、これから起こる熾烈な争いに気づくまでも無かった。

第10話 それぞれの休日

今、前回のテストの敗者である僕は罰ゲームを執行されていた。罰ゲームの内容は『恵美と1日デート』であった。

まあ、実際のところ女の子とデートした事なんか1度も無かった。

（瑞葉との買い物、瑞葉曰く『デート』を除いて）

なので、正直なところ嬉しさは半分あった。

しかし最近のバイトは重労働じゅうろうどが主な仕事だったので、金曜日あたりになると肉体の限界が訪れてしまう。

よって、僕にとっては土・日は唯一の休養日であったのであったが

……

「じゃあ、まずウォーターランドに行こう」

「ああ、僕、水着持ってないよ」

まるで事前に予定していたかのように恵美は家を出て少し経ってから話を切り出してきた。

「大丈夫だよ、今日の為に私が選んできたの」

なんて娘なんだ……

と思いつつも、水着があるので断る理由も見当たらないので仕方なく行く事になった。

その頃一方、家に取り残された瑞葉はある作戦を実行しようとしていた。

「あつ、もしもし？私だけど、今から家に来てくれない？
えっ、うん。非常事態なの！じゃあ、なるべく急いでね」

瑞葉はとある人物に電話で用件を伝えたと、自分の準備を始めた。

「お兄ちゃんは、私のものなんだから……フッフ……」

着々と怪しいものを鞆に入れていくことなど、東馬は知る由も無かつた。

「つ、着いた……」

やや暑い中を歩く事30分、ようやく恵美と僕は目的地のウォータ
ーランドに到着した。

正直これだけで若干体力の限界が訪れていたが、僕自身も先日オ
プンしたばかりのウォーターランドには少し興味があつた。
それに、恵美が無料招待権をもっていたのでこの機会を逃したらも
う二度と来れないかもしれないと思いここに来た有様だつた。

「じゃあ着替えてくるから、入り口で待っててね」

「ああ……」

中に入って案外広い事に気づいた。

それに、さきほど置いてあつたパンフレットの地図を見る限りでは
1日で回るのは不可能なくらいの広さだつた。

「これを1日で回るのか……」

今日のお先は真っ暗だった。

その頃並川家には着々と面子^{めんつ}が揃い始めてきた。

——ピンポーン——

「どうぞ〜」

居間にいた瑞葉は玄関のドアに向かって適当に返事をする、それを聞いてかドアが開いた。

「おはよう、瑞葉ちゃん。こんな時間にどうしたの〜？」

玄関から現れたのは成瀬だった。

「遅いよ、優ちゃん」

そう答える瑞葉の周りには3人ほど人がいた。

「あれ？紗枝に柊先輩に、不浄先輩まで……なんで？」

不思議なメンバーが集ったこの部屋で怪しい作戦会議が開かれようとしていた。

「まあ、細かい事はさておき今朝緊急事態が発生した。内容は並川東馬の拉致である。一刻も早く兄を解放せねばならない。

諸君等の協力を要請する」

軍人ばりの口調で瑞葉は話していた。

「瑞葉ちゃん……良く分からないよ……」

若嶋は頭にハテナを出しながら内容を整理しようとしていた。

「つまり……今朝お兄ちゃんが見知らぬ女とデートに行っちゃったのよ！」

「「ええー！」」

予想だにしなかった出来事が起こったせいか、2人ばかり驚いた声を上げた。

「私達がそれを阻止しなきゃお兄ちゃんが……」

瑞葉は涙目で皆に訴えかけた。

「分かったわ！私達であのバカの目を覚ませないと……！」

終の理解には僅かな誤解はあるが、まあ大方の内容は一致しているので良しとした。

「お兄ちゃん等はウォーターランドに向かったみたいだから私達の今からそこに向かうわよ」

「「おおー！」」

こうして瑞葉命名『お兄ちゃん救出大作戦（OKD）』が決行されることになった。

「遅いなあ……」

早々と着替え終わった僕は、入り口の壁に寄りかかって恵美を待っていた。

ドーム状の園内は快適な温度に保たれ、1年中利用が可能になっていた。

それはそうと、かれこれ20分は待っているのだが、一向に姿を見せる気配が無かった。

「東馬さん、お待たせ」

そこに現れたのは大胆にも水色のビキニ姿の恵美だった。

「め、恵美ちゃん……その格好は……？」

まだ中3ではあるが、スラッとして締まったボディーに驚くほど似合っていた。

「変……かな？」

やや頬を赤らめ、上目遣いに僕を見つめてきた。

「いや……よく似合ってるよ」

僕の言葉を聞き、恵美は緊張しきった表情を緩めた。

「じゃあ、行こう」

恵美は僕の手を握ると第一目標地点へと走り出した。

「うう……なんか良い感じに手なんか繋いじゃって……」

ジェラシーを感じている怪しい人影が3つほどあった。

「それにしても、千草さんが通りかかって助かったよね。やっぱり千草さん家ってお金持ちなんですね」

若嶋は隣に座っていた千草と話していた。

「いえいえ、そんなことはないわよ。たまたまウォーターランドに遊びに行こうと思って、たまたま爺やが運転しているリムジンが若嶋さん達の近くを通っただけよ」

その凄まじい偶然により瑞葉等は家を出た直後に千草が乗る車に出会った。

互いに顔見知りであった事もあり、簡単に事を説明しただけで乗せてくれる事になった。

結局のところは千草もここに用があったと言ってもはいるが、なんだかあまりにも話が上手く行き過ぎていて若干不安にもなっていた。

「それよりも私達はどうするの？着替えないの？」

ここに来てすぐに東馬の姿を見つけたので、まだ私服のままであっ

た。

「そうね。私達も急いで2人を追うわよ！」

私と優ちゃんと柊さんは第1陣として急いで着替えを。

紗枝ちゃんと千草さんと不浄さんは兄の尾行を続けてください。

連絡はすべて私の携帯に！

では、散開！」

瑞葉を中心に構成されたチームはリーダーの指示によって一斉に動き出した。

そして10分後……

「じゃあ、私達も追うわよ！」

着替え終わった瑞葉等、チーム『M』は千草が率いるチーム『C』の任務を引き継いだ。

「目標が移動を開始しました。目的地はA6、超高速ウォーターズライダーと確認しました」

成瀬は軍人になりきって任務を行っていたが、柊にとってはどうしても瑞葉の口調が合わないのか少々不機嫌だった。

「じゃあ、私達は先回りを……オペレーション作戦Aを実行する。

千草さんへの伝達を優ちゃん、お願いできる？」

「了解」

そう言うとな成瀬は携帯を取り出して、千草に電話をし始めた。

その頃一方たちはと言うと……

「ほらほら、早く早く」

体力不足のせいで、早くもバテ気味の僕は恵美に手を引かれて超高速ウォータースライダーへ向かっていた。

「ハ、ハ、ハ……もう少しゆっくり……行かないか……？」

「でも時間が限られてるから……」

悲しげな表情を浮かべながら恵美は呟いた。

そう言っている間にも目的の場所に到着した。

「って……めっちゃ並んでるし……」

それもそのはず、今日は休日であつたため園内は超満員であつた。

「けど……じゃあ〜ん」

恵美はとっておきのアイテムを手を取った。

「それは……？」

当然その代物しろものが分からない僕は恵美に訊ねる。

「なにを隠そうこれは……フリーパス（シルバー）なのだ〜！」

説明しよう、このウォーターランドには特別枠が存在する。

その特別枠の中にもランクがあり、ホワイトフルー白・レッド青・シルバー赤・ゴールド銀・金と5段階ある。

主に一般には白の入場券を与えられるが、中には幸運にも金の入場券が与えられる時もあった。

配られた招待券には各々番号が書いてあり、その番号によって入場の際に招待券と引き換えにこの5段階に分けられた入場券が渡される。

封に入ったまま渡されるので、渡した側も受け取った側もその時点では何も分らない。

開けて見てからのお楽しみと言うわけだ。

それで、5段階に分けられている理由は……

白：無料で入場出来る。

青：白に加えて、飲み物も無料。（飲食店のみ）

赤：青に加えて、自転車の貸し出しも無料。（1日のみ）

銀：赤に加えて、乗り物のフリーパスがもらえる。（並ばずとも乗れる）

金：銀に加えて、全ての施設が無料。（1ヶ月有効）

とこんな感じである。

って、僕はいったい誰に説明してるんだ……？

「おおー！恵美ちゃん、凄いよ！」

僕は初めて幸運な人を目にした。

「へへへ……そうかな？それより、早く乗ろう」

僕たちは楽しげに超高速ウォータースライダーの入場口を抜けた。
この時はまだ、瑞葉の行動には気づきもしなかったのであった。

第11話 長く伸びた2つの影

僕は恵美と一緒に超高速ウォータースライダーの階段を登っていたのであったが……

「あれ……これってどこまで続いているの？」

登り始めて10分。

フリーパスのお陰で人ごみは回避出来たものの想像を遥かに超えていた。

地上100mの螺旋階段には人が渦のように蠢もよほいていた。

「着いたあゝ」

僕とは対称的に恵美は元気いっぱいの様だった。

「はい、じゃあ次の方」

整備員の人の誘導に従おうとした僕であつたが……

「……？」

どこかで見たような顔だと思い、振り返って見る。

日よけ対策なのか、帽子を深く被り表情までは分からない。
しかし、この外見は……

「……成瀬？」

僕の呼んだ声に過剰な反応を示しながらも、成瀬はこちらに振り向

きながら言った。

「ち、違います。ひ、ひ、人違いじゃないでしょうか？」

どこからどう見ても不審な動きをとりながら成瀬はこの場から離れようとしていた。

「こんなところで何やってるんだ？まさか、瑞葉の差し金じゃないだろうな？」

ビクツと肩を震わせると、成瀬はあたふたしながら僕に言った。

「そ、そんなんじゃないですよ。」

実は瑞葉ちゃんが『先輩が見知らぬ人とデートしてるからそれを阻止しよう』なんて言ってたから協力してるなんてことは無いですよ。」

おもいつきり言っちゃってるし……

「はあ……」

まあ、これでここに瑞葉も来てるということは分かった。

この先は瑞葉とも相手をしないといけないと思うと、ぐったりしてきた。

「早く行きましょ。」

そんなことはつゆ知らず、恵美は僕の腕を引っ張りながらウォータースライダーの下降口へと歩いていった。

「じゃあ、東馬さんが前で……」

僕がぐったりしている間にもう既に下降口に座らされていた。しかも、ご丁寧にカウントダウンまで始めちゃっていた。

「えっ、ちよっ、ちよっと待ってえっ!」

立ち上がるうとする僕の体を後ろで恵美がしっかりと捕まえていた。

「2、1、ゴー」

係り員の掛け声と同時に僕の前にあったバーが勢いよく上がった。

「わあ~~~~!」

後ろから思いっきり押されて僕等はすべり出した。

ウォータースライダーの中は真っ暗な上、感覚からいって垂直に落下している感じだった。

感覚から……なんだか背中に柔らかいものが……

っと思ったら恵美は僕の腰に手を回して、抱きかかる格好になっていた。

「恵美ちゃん、ちよっとくっつきすぎじゃない?」

そんなことが頭にはあるのだが、このウォータースライダーの加速度が予想外で口が開かなかった。

開いたとしても、出てくるのは叫び声だけだった。

「ああ~~~~!」

ジャボーン……

物凄い勢いで僕等は水中の中に投げ出された。

おもいつきり水面に顔を打ち付けた僕は水中から地上へ出ようとしたその時だった。

水面を指して浮上している僕の上に、突如黒い影が出来た。

そう思った次の瞬間には、なにか重たい物が降ってきてそのまま僕の意識は途絶えた。

時は遡り15分前。

瑞葉らは行動を開始していた。

「優ちゃん、そっちの準備は？」

ビーチパラソルの下で瑞葉は携帯で話していた。

「うまくいったよ！ちょっとおやすみしてもらったから」

これで第一段階はクリアされた。

そう思った瑞葉は通話を切り、また次の相手に電話し始めた。

「あつ、不浄先輩？そちらの準備は？」

こんどは千草らのチームに連絡を取る。

「……問題ない」

いつも通りの単調な口調だが、どうやら事は上手く進んでいるらしい。

「では、目標が降下したらまた連絡を入れるので……」

「……了解した」

案外こういうのが好きなんじゃないかと思わせるくらい不浄は乗り気であった。

そして、時が来た。

瑞葉の携帯に連絡が入るとすぐさま不浄にことが伝えられた。

光の具合から、ウォータースライダーの中の人影は確認できたのであとはタイミングを合わせるだけだった。

「5・4・3・2・1……目標の水中への投下を確認しました」

近くに居た若嶋はそう瑞葉に伝えた。

頃合を見計らった瑞葉は不浄に行動の開始を伝えた。

そして……

ドボン……

東馬の浮上ポイントに不浄はスイカのビーチボールを投げ込んだ。それもただのビーチボールではなかった。

中に空気をいれる代わりに大量の湿った砂が入っていた。

そして、かなり重くなったビーチボールを不浄と柊が東馬に向かって投げ込んだのであった。

その様子を確認した瑞葉は皆に言った。

「オペレーション作戦Aは成功。これよりオペレーション作戦Bに移行する」

そう伝えたと、皆は次の行動へと移った。

「うう……ここは……？」

気がつくとは僕は医務室のような場所に運ばれていた。

それにしても一体なにが起こったのか分からずにいたが、一つだけ言えることは瑞葉が関わっていることだった。

「そういえば恵美ちゃんは……？」

僕が気を失ったせいで、恵美ちゃんとは離れてしまったらしい。立ち上がってみると強打した頭が痛み、フラフラの状態だった。

「あつ、ダメですよ。まだ起き上がっちゃ……
ちゃんと安静にしていないと……」

医務室のドアが開くと、そう言いながらナース服の人がこちらに向かって歩いてきた。

「……お前、何やってるんだ？」

まだ覚醒しきれていない頭ではあったが、この人物にも見覚えがあった。

だが、普段の彼女の性格からして考えられないことをしていたので内心驚いていた。

「何って……あんたが変な事やってるからこんなことしてるんじゃない！」

ナース服を着ていたのは柊であつた。
しかも、なかなか似合っていた。

「お前も瑞葉になんか言われたのか……
それより時間は……？」

時計を見て見ると既に時刻は4時を回っていた。
かれこれ6時間は意識が飛んでいた事になる。

……って、あれ？これって重体じゃあ……

「僕に睡眠薬でも飲ませたのか……？」

途端に柊は僕から目をそむけた。

「はあ、いつたいお前等は何がしたいんだよ……？」

そんな疑問を投げかけながら、立ち上がった。
が、やはり覚醒しきれていない頭で立ち上がったので足が纏れてしまい、そのまま倒れそうになった。

「危ない！」

そう言うと柊は僕の体を支えた。

「まあ、バカ！こんな体で動けるわけじゃないじゃない！」

柊は僕をベッドに戻そうとするが、僕はそれを拒んだ。

「僕にはやらなきゃいけないことがあるんだ……だから！」

僕は体に鞭を打ちながら医務室の扉を目指した。

「並川君にはそんなにあの子が大事なの……？」

後ろから柵の音が聞こえ、僕は足を止めた。

「あの子は大切だ……。それはみんなと同じくらいいたいせつだよ。
あの子だけじゃない……。柵も不浄も成瀬も若嶋も千草も……。
そして瑞葉だって僕には何一つ失ってはならない大切な人だ。
だから僕は行って今日の事をちゃんと謝らなきゃいけないんだ……」

僕はそう言い終わると医務室の扉に手をかけた。
その時だった。

「お兄ちゃん……私、私……わああ」

ドアの外には瑞葉が泣きながら座り込んでいた。
どうやらさっきの話は筒抜けであつたようだった。

「おいおい、泣くなよ。大丈夫だから……」

そう言つて慰めていると奥からゾロゾロと人が出てきた。

「悪いな……瑞葉が迷惑かけたみたいで……」

そこにいた成瀬や若嶋・不浄・千草に僕は言った。
そしてその奥には恵美もいた。

「恵美ちゃん、今日はゴメン。なんか色々と巻き込んだみたい
いで……」

そんな僕の言葉に首を振りながら恵美は僕に言った。

「いえ、今日は楽しかったです。

ホントはもつといっぱい遊んで居たかったですけど、なんか妹さんに余計な心配をかけさせちゃったみたい。

だから今日はここまで」

明るく振舞っているように見えるが、僕にはその姿が悲しそうに見えた。

こうしてなんとか丸く収まったようであつた。

そして、僕等は着替えるとウォーターランドを後にした。

僕らは柊や成瀬等と別れると恵美を3人で帰路を歩いていた。

まあ、実を言うと瑞葉はウォーターランドを出ると疲れきつたのかそのまま僕に倒れかかるように眠りに入ったため、今は僕は瑞葉をおぶって歩いていた。

「東馬さん、またお誘いしていいですか？」

静まり返った街のなか歩いていると、突然恵美は僕に言った。

僕は少し考える表情を見せながらも了承すると、恵美はホッとした表情を浮かべた。

「よかったあゝ。やっぱり私、東馬さんのことが好きみたいです」

そう言うとき恵美は「家がこっちだから……」と言って走っていった。

「『好きみたいです』か……」

僕は背負っていた瑞葉の顔を見た。

気持ちよさそうに寝ている姿を見て僕は微笑んだ。

「幸せな奴だな。こいつは……」

夕日で染まった道には長く伸びた影が2つ揺れていた。

第12話 幻想と空想の狭間で……

いつも通りに寝て、いつも通りに起きる。

そこには変わらない日常があり、永遠と繰り返される。

そう、それはまるで螺旋^{らせん}回段のように……

そんな日常が当たり前だと思っていた。

よもやあんな事が起ころうとは夢にも思っていなかったのだから……

6月も終わりを迎えようとした頃だった。

梅雨の季節も過ぎようとし、本格的に夏が近づいてきたような気配を感じていた。

そんな代わり映えのある季節の中で、僕の日常だけが変わらないでいた。

その変わらない日常に大して不満を持つ事も無く、それが当たり前のように思っていたのではあったが……

「なっ……なんだこれはアッ?」

目の前で起こっている事に思考がついて来れず、思わず叫んでしまった。

あれは3時間ほど前のことだった……

ようやく長かった1週間も終わり、休日を迎えようとしていた金曜日の事だった。

「あゝ、やっと終わったよ」

そんな独り言を言いながら、家に帰る途中だった僕は突然あることを思いついた。

「そうだ！月曜が休みなんだから、3連休……この間にこの前買ったゲームでも……」

来週の月曜日が学校の創立記念日で休日で、しかもバイト先の店が先週から改装を始めて1ヶ月は使えないので、その間休業になっていた。

「そうと決まれば善は急げ……ってことだな！」

そう言いながら僕は1人で帰路を走っていった。走り続ける事約5分、息を切らせながらも僕は家にたどり着いた。

「ただいま〜！」

靴を脱ぎ捨てながら、誰もいないはずのリビングに向かって言った。すると不思議な事に返事が返ってきたのであった。

「おかえり〜、お兄ちゃん♪」

「なんだ……瑞葉、帰ってたのか……」

一瞬、幽霊でもいるのではないかと思った自分が恥ずかしかった。

「そうだよな〜、幽霊なんか非科学現象なんかあるわけないよなあ」
「」

脂汗を垂らしながら、瑞葉に作り笑いをして僕は2階に上がった。

「はあ、ビックリした。」

まさか瑞葉が先に帰っていたとは夢にも思わなかった……

そう言えば、今日は全部活休みだもんなあ」

不覚だった……」

などつぶつぶ言いながら着替えると自室のTV台の下からゲーム機を取り出すと、ラッピングしたままの真新しいソフトを鞆から出した。

それは2週間前に中古屋で買ったものだった。

なぜかは知らないが、その品誰も手をつけずに新品のまま置いてあった。

5000円台が一般のゲーム社会において、そのゲームだけは規格外だった。

「けっ……桁が1つ足りない……」

初めて見た時はそう思った。

しかし、よく見て見るとそのゲームの製造年が今から約5年前のもだった。

確かに古い品であった。

それと同時に古いからこそ付くプレミアがあった。

それに販売数が少ないとなれば、さらに価値が高まる。

「まさか……これは……」

その破格の安さに負けながら、内心プレミアが付いている事を期待しつつ僕はそれを買った。

しかし、よくよく調べて見るとその品は5年前に小ブレイクしたマイナーなゲームであった。

『あまりにマイナーすぎて知ってる者が少なすぎ、あまり価値は無い』

と大智に話したときにそんな事を言っていた。

そして、今僕はそのゲームをしようという状況で会った。

「全く期待させやがって……」

安さに負けた自分が醜くなってゲームに当たって見るが、もちろん返答なし。

それでも僕は仕方なしにゲームを始める事にした。

『タラララ〜ン……』

本格RPG「ランゲージ・ドラゴン」……』

TV画面に妙な文字が流れた。

「ん……？なんだこれは……？」

パッケージには『ボックス・フロンティア』って書いてあったのに

……

まさか、箱と中身が違う奴か……！？

だっ……騙された……」

中古屋では稀に起こる現象で、新入りの店員だとかこういう事が起こってしまつらしい。

『——はじめから

はじめから

はじめから——』

タイトル画面の下に浮かび上がった文字には『はじめから』しかない

かった。

「なんだよ、これ？バクってるじゃないか！」

若干イライラしながらTVに愚痴を言い続けた。

しかし、それでも僕は『はじめから』を選択した。

『ここは魔王によって支配される世界。

あなたにこの世界は救えますか……？

YES / NO』

真っ暗な画面の下にその文字だけが流れる。

「は……？当たり前じゃん！」

『YES』無くしてどうやってゲーム始めるんだよ……！」

イライラがピークに達しかけながら『YES』を選択した。

すると、僕は選択した瞬間に部屋の電気が切れた。

が、なぜかTVだけは消えずに付いたままだった。

『では、あなたに託しましょう……

この世界の命運を……』

その文字を見た瞬間に僕は体が浮くような感覚に陥った。

「えっ……ちよっ、ちよっと何……？」

なんで体が勝手に……

分かった！これは幽霊の仕業だ……

さっき僕が『幽霊なんか非科学現象なんかあるわけないよなあ』

なんて言ったから、怒った幽霊達が僕に幻想を見せてるんだ。

そうに違いない……よな……？」

気が付くと僕の体は徐々にTVに近づいていた。
そしてTVの画面には先ほどの文字はなく、中心を軸に画面が渦巻いていた。

「か、体が……引きずりこまれる。
だっ、誰か……。助けてくれ！」

瑞葉、うわあああ……」

そう叫ぶ間に僕の体はTV画面に吸い込まれていき、そして遂に僕の体はTVの中に飲み込まれてしまった。
TVの中は深海のように深く、暗かった。
そして僕の意識もそこで途切れてしまった……

その頃リビングにいた瑞葉は自分の部屋に携帯を取りに階段に足をかけた時だった。

「——瑞葉、うわあああ……」

そんな声の上から聞こえてきた。

「お兄ちゃん……？」

不思議に思った瑞葉は携帯をとる前に、東馬の部屋のドアに手をかけた。

「お兄ちゃん……？入るよ……」

ドア越しにただならぬ気配を感じ、額に汗が滲んだ。

そして瑞葉は覚悟を決め、ドアを開けた。
が、そこには人一人、誰もいなかった。

「空耳だったのかなあ？」

瑞葉が不思議に思いつつも東馬の部屋から去っていった。
東馬がいなくなったことなどつゆ知れずに……

「うつ……うつ……」

落下した時に強く頭を打ったせいか、少しふらくものの僕は意識を取り戻した。
周りが真っ暗でよく見えないが、上空にはどうやら光があるらしかった。

見たところ大した高さではなかったので、壁に指を掛けて登ってみた。

するとそこには青い空に一面の草原に覆われていた。

「なッ……なんだこれはアア？」

目の前で起こっている事に思考がついて来れず、思わず叫んでしまった。

記憶の端を辿ってみてもTVの中に引きずり込まれたまでしか記憶に無かった。

「ここは一体……どこなんだアア？」

その叫び声だけが草原を駆け抜けていった。

第13話 西端の街『ディ・ベルト』

見覚えの無い異世界に飛ばされてしまった僕は途方に暮れていた。一面に広がる草原の上を歩き続けること30分、街の影一つ見えずにただひたすら歩き続けていた。

「つ、疲れた……」

変わらぬ景色に嫌気が差し始め、僕はその場で座りこんだ。未だに信じられぬ状況下の中でこつも行動が出来る自分が少し誇らしくなった。

「静かだな……」

この場所には風が草むらを走りぬける音しかなかった。目を閉じて耳を澄ませていると、遠くの方からある音が聞こえてきた。

パカパカパカ……

その音は次第に近づいてきていた。

僕は目を開けその音の方を向いて見ると遠くから馬が歩いてきていた。

いや、よく見て見るとそれは馬に荷台を引かせていた人がいた。てつきり馬が逃げてきたのかと思っていた僕は自分が恥ずかしくなった。

そんな事を考えているうちにその馬車は僕の前まで来ていた。

「あつ、あの……」

馬車が僕のそばを通り過ぎようとした時に僕は上にいる人に言った。

「何かな？見かけない顔だが……ひょっとして旅人かね？」

どうやらこの人は近くの街に住んでいるらしい。

この人に付いて行けば街に着くだろうと思い、僕は返答した。

「はい、そうなんです。ここに来るのは始めてで……道が分からなくて困っていたところだったんです」

自分でも上手く話を合わせられたと感心する位口がまわった。

「ああ、そうか。じゃあ私が街まで連れてってやろう」

交渉成立。

そんなわけで街に行く事になったのではあったが……

「あんた職業は何やってるんだ？
こんな物騒な世の中で旅をしてるなんて、ただ者じゃないね？あんな」

不意にそんな事を聞いてきたのである。

この世界に来てまだ1時間もしないのに、僕がそんなこと分かるわけがない。

「ええ」と、学生っていうのも変だから無職？フリーターとも言っかな？

それともニートか！？」

慌てふためいている僕を見て何を言っているのか理解しきれなかったその男は笑いながら僕に言ってきた。

「あんた職が決まっていけないのにこんな事してたのか？
ちゃんと職を決めなきゃ、将来が不安だよ？
街に着いたらしっかり職を決める事だね」

そんな忠告を受けているうちに僕等は街にたどり着いた。

「ここが街かあゝ！」

「そうさ！ここが西のはずれの町『ディ・ベルト』さ」

街の入り口で下ろしてもらった僕はその人にお礼を言うと、その人は街の奥へと馬を走らせていった。

「さてと、まずは教会に行くんだっ たな……」

その人に教えて貰った通りに教会に向かう事にした。
ほどなくして教会についた僕は大きな扉を開けて中へ入ろうとしていたのであったが……

「あつ……開かない……」

なんだこの扉は！堅すぎて開かないじゃないか！」

癪癪を起こしていた僕の後ろから誰かに肩を叩かれた。

「あれゝ、お困りかなかな？」

だ、誰だ……この人……

いきなり出てきて妙に馴れ馴れしいこの人は一体……

僕は振り返って見てみるとそこには僕よりやや小さめの女の子が立っていた。

「君は……？」

「私？私はフローレラ・リ・ジェレン。この教会の淑女って奴かなかな？」

使い方が間違っているような……

まあ、この人がいれば中に入れそうなので話をあわせることにした。

「そう、この教会に用があつてきたんだけど開かないの？」

「うん、今は敵が押し入ってくるかもしれないって言うから表の門は閉じてあるんだだよ。

入るとしたら裏から回らなきゃダメなのなの」

フローレラはそう言うと言と教会の脇の道を教えてくれた。
その道を2人で進んでいくとあるドアにたどり着いた。

「ここが入り口なんだなあ」

そう言うと言とフローレラは中に入っていた。
僕はそれに続く。

「お待ちしておりました。東馬様」

中に入るとすぐに大勢の人が待ち構えていた。
てかなんで僕の名前を知っているのかが不思議だったりした。

「これは創造主『アモール』様の意思であり、あなたの運命なので
す」

祭壇らしきところの奥から1人の女性がこつちに歩いてきながら言
った。

「そうか……あれはそのアモールって奴の意思なのか……
って信じられるかあゝ！」

「まあゝしょうがないんじゃない？腹決めちゃいなYO！」

先ほどから刻々とキャラを変化させ続けるフローレラはスルーして、
僕は目の前の女性と向き合った。

「フローレラの言うとおりです。あなたの運命は既に決まっている
のです」

そんな事を言いながらその人は僕の目と鼻の先にいた。

「わ、分かったよ……ああゝ、涙目になりながら近づいてくるな！
そついうのには弱いんだよ」

僕はそう言いつつ、その人を自分の身から遠ざけた。

「んで、具体的には何をすればいいんだ？
この世界の事は全くとって良いほど何も知らないぞ」

「それならご心配はありません。
貴方にはまず、職業検査を受けてもらいます」

まさかRPG定番のあれか……？

戦士やら魔法使いやら決めるやつか……？

「はい、そうです。ではこちらに……」

「ええ、ちょっと……待って……てゆうか人の心を読まないで！」

そして職業検査という拷問が始まった……。

第14話 『無』の世界

「ねえ、1つ聞いても良いかな？」

僕は地下のとある部屋に連れてこられた。

教会の掟とやらで目隠しさせられ歩かされていた。

「なんででしょうか？」

「なんで……なんで手足を縛るんだ？」

そう、この部屋に入るとすぐに椅子に座らせられたが何故か拘束具を付けられた。

「それは、それだけこの儀式が恐ろしい物だからだよ」

なんでお前までいるんだよ……フローレラ……

なんて思いつつも着々とその儀式という職業検査が始まった。

「偉大なる神、アモールよ。

どうか我等にお導きのお言葉を」

『——その声、しかと受け取った。

我が汝に問う。汝、如何なる力を欲す？

汝その力を奈何せん』

その声は部屋の奥にある滝の中から聞こえてきた。
どこか懐かしくて不思議な声色だった。

「僕はただ元の世界に帰りたいだけだ。それ以外は何も欲したりはしない！」

自然とそんな言葉が口から漏れた。

『ならば受け取るがよい。』

この先汝の意思が変わらぬ限り、我の力は消えぬ』

そう言うとその声は消えてしまった。

あれ、恐ろしい事なんて起こらないじゃん……

なんて思っていたのもつかの間で、それは起こってしまった。

「ああ、なんたるお言葉……」

あれがとうございます。創造主アモール様。

では始めましょうか、真の職業検査を……」

「え？もう終わったんじゃないの……？」

ちよつと、なんで鞭なんでもってるの……

うわ、わあああ……」

その後2時間たつぷりと拷問を受けた。

ああ、これが職業検査なのか……

と1人で勝手に納得しながら僕の意識は途切れてしまった。

そこは何も無い世界だった。

ただ一面に『無』が広がっていた。

誰もいない、何もない。

自分が自分であるかも分からない世界に僕はただいた。

いや、物質の存在としては無かったが、確かにそこに僕はあった。悲しみは無かった。

それよりかなんとか暖かい感じがした。

『ここにおいで』

空間に響く音を感じた。

それは僕を呼んでいるようにも感じられた。
体は無い。

けど動く事は出来た。

ただひたすらに浮遊した。

右も左も、上も下もない『無』の世界。
それでも僕は前に向かった。

『よく来たね、待ってたよ。』

僕は君をずっと見ていた。

そして君が僕を望んだ』

僕が……望んだ……？

『そう、君が僕を欲したのさ。』

だから僕がここに連れてきた。

ここはこの世界の中心。

君のいう『無』の世界さ』

世界の中心？

君は一体……

『僕はだれでもない。』

存在には意味を持たないからね。

僕等は皆、世界の一部であり宇宙の末端さ。
それには意味なんて持ってないんだよ』

なら何故僕に呼びかける？
存在に意味を持たないのなら、僕の前に現れる意味のないじゃないか。

『それは違う。』

確かに僕の存在には意味は無い。

だが君の存在には意味があるんだ。

それに僕は君の一部でもあり、君自身でもある。

けど、僕は君とは違った存在なのさ。

世界に存在するのは1つの物。

万物の真理では僕は存在することを許されていない。

だから僕の存在には意味が無い。

けど、君になら……

君になら力を分け与えられる』

話の内容は分からない。

けど言いたいことは伝わってきた。

つまりは、君と僕は表裏一体で僕が望むというなら君の力を分けてくれると言ったところか……

『そういう事さ。』

さあ、じゃあ契約をしよう。

君が望むの物の為に僕が力を貸す。

そして君も僕の望みを叶える』

いいだろう、契約しよう。

僕は君を望み、君は僕を望むならば……

『うん、じゃあ契約成立だね。』

もうじきお迎えが来る頃だろう。
これだけは忘れちゃダメだよ。
自分を見失うな……」

それを言うとその響きは収まった。
そして再び『無』の世界に戻った。

「……きて……ねえ、起きてったら」

「うつ、うつん……」

目を開けると僕はベットに寝かされていた。

「こ、ここは……？」

「ここは私んちだよ。まあ、親は出かけていないんだけど……」

どうやら悪夢の拷問から解放されたらしい。
外を見ると既に真っ暗になったいた。
そんな僕をどういったわけかフローレラの家に運ばれた。

「そう言えば、あの拷問の……職業検査の結果はどうなったの？
てかあれって職業検査に関係ないんじゃない？……」

再びあの悪夢を思い出してしまい、背筋に悪寒が走った。
二度とあんなもの受けるか！
と胸に堅く誓いを立てた。

「ああ、あれですか。
あれは確かもう1度やり直さないと……」

つてセリ様が言ってたような……」

「ひい……！」

あれだけは、あれだけは勘弁してくれ……！」

セリ様というのはおそらくあの教会で話した人だろう。

それにあの拷問を執行したのも何を隠そうそのセリ様とやらだった。見かけは優しそうだが、やる事は恐ろしい。

そんな人だった。

「あつ、でも最後には何か決まったみたいだったから大丈夫かもかも！」

それになんか通知を渡されちゃったりして……」

そういうとフローレラは持っていた封筒を僕に渡してきた。

「ええ……と、何々……」

『この度貴方は勇者に選ばれました。おめでとうございます。』

これによって貴方は魔王を倒さなければなりません。

その為にもそこにいるフローレラを連れて行って下さい。

その子をよろしくお願いします。 Byセリ』

「と、言うわけでふつつか者だけどよろしくなの……！」

「……えつ、ええつ……！」

後日この晩、街では魔物の声が聞こえたという噂になった位大声を出してしまっただけらしい。

そして翌朝……

「ふああ……よく寝たあゝ。」

「ってなんでフローレラも一緒に寝てるんだよ！」

「昨晚は疲れが残っていたのか、あの後すぐに眠りについた。そして朝起きたらこんなことに……」

「ふああ……あつ、おはよう。東馬」

「おい、おはようじゃないだろう！」

「なんでお前が僕の布団の中にいるんだよ！」

「ええゝなんでって、普通のことでしょう？」

「これも後日知った話だが、どうやらこちらの世界では睡眠というものには皆でまとまって取るものらしい。」

「けど、これだけはどうしても慣れることは無かったというのが事実であつた。」

「そんな事より、早く旅に出ようよゝ！」

「確かにフローレラの言う事にも一理ある。」

「がしかしその前にやっておかねばならないことがあつた。」

「ちょっと待ってくれフローレラ。」

「君はあの教会の人なのにここから離れてもいいのか？」

「今一度考え直す気は……」

「無いよ。これは私が決めたことだし、それに創造主アモール様のお言葉でもあるの……」

いつもの話し方とは違った感じからすると、どうやら真面目な話らしい。

「そう……君がそう決めたというのなら僕がどうこう言う権利はないけど……」

「ただど1つだけ、1つだけやっておきたいんだ。もう1度あの教会に……」

僕は意識を取り戻してからあの『無』の世界について気になっていた。

もしかしたらセリさんなら、いやアモールなら知っているかもしれない。なかったからだ。

「そう言えば、気になっていたんだけどね……」

「ん、何？」

不意にフローレラは僕に訊ねて来た。

それはもういつもの様子だったので、僕もそれに合わせて対応する。

「その左目、ここに来た時は何とも無かったのに……何かしたのかなあ……って」

その突然の告白に一瞬戸惑うってしまった。何を言ってるんだ……？

僕が何も分かってないと思ったフローレラは僕に手鏡を渡してきた。それを受け取り鏡を覗き込んで僕は言葉を失った。

左目の……左目の色が変わった……

「なっ、なんだこれは!？」

別に何をしたというわけでもなく、身に覚えが無かった。

「ううゝん……確かこれは契約の印だと思うんだけど……
何かしたのかなかな？」

僕はこれまでの事を思い起こした。

そして『無』の世界でそのような事をしたのを思い出した。

「……契約した。」

ああ、確かに僕は『無』の世界で契約を行ったような……」

「『無』の世界？」

フローレラは頭の上にクエッションマークを浮かべながら僕に言った。

僕は『無』の世界の出来事を話した。

「確かあの時世界の中心だとか存在がどうか……」

まあ、よく意味は分からなかったけどね」

その話を聞いてフローレラは啞然としていた。

「それ、神話で聞いたことがある……」

聖なる世界にて契約を結んだ者はその者の願いが叶う。

しかしその力を悪に使えば即ち身を滅ぼし、善に使うなら聖獣が力を貸してくれるとか……」

もうその話は1000年も前の話だから詳しくは分かっていないの。
でも1つだけ……1つだけ事実があった。

それと年を同じくして、大邪神『ヴォゼリア』が復活した。
そして聖獣を操る者と『ヴォゼリア』との決戦があり、なんとか聖獣が大邪神を倒して再び封印をしたの。

そして聖獣を操る者を勇者と称し、この世界では伝説になっている」
話をし終えたフローレラの目は輝いていた。

「その聖獣と契約した人がいるだなんて……
しかも一緒に旅を！」

ジリジリと迫ってくるフローレラから逃げつつ僕はもう1度教会に行く事にした。

突然家を飛び出した僕をフローレラが追ってきた。

確かに契約をしたが、それはまだ聖獣と決まったわけではないと思っ
った。

もしかしたら違うものかも……

そんな疑問を解決すべく教会を目指していた。

「セリさんいますか？」

教会の裏の扉を開けると既に地下への隠し扉は開いていた。

まるで僕が来るのを知っていたかのような振る舞いに僕は息を呑み
つつも階段を下りた。

『待っていたぞ、勇者東馬よ……』

地下部屋に入るとその声が聞こえてきた。

「創造主アモールよ、『無』の世界とはなんですか？
そして僕が契約したのは……」

『汝が契約したのは間違いなく聖獣だ……
なんなら試しに召喚してみるがよい。

この世界には5匹の聖獣がおる。

空の聖獣『クラウン』、風の聖獣『フロー』、地の聖獣『グロード』、
水の聖獣『セレーラ』、そして光の聖獣『ゼクサス』。

これらが世界の創造主である我と共に崇められる5大聖獣だ。
そして『無』の世界とは根源の世界とも呼ばれている。

人の本質が、心が澄んだ者のみ行く事が出来る世界。

それぞれの世界に聖獣が住み、その者の意思で呼び出される。

そして汝が出会ったのは光の聖獣『ゼクサス』。

彼が汝を選んだわけは知らぬが、確かに汝は聖獣に選ばれた』

アモールの言葉を10割理解したわけではない。

けど、やはり大体は理解していた。

「その話を聞く限りでは、再びこの世界が危機に瀕しているということか？」

『そうだ。

1000年前とは違った、今度は魔王を復活させようと企んでいる者がいた。

そして先日ついに魔王が復活したのだ』

魔王……勇者と相反する存在。

そして勇者に選ばれたのは僕……

「分かった。必ずや世界に平和を取り戻してみせる」

そう言う僕は教会を後にした。

教会を出ると外でフローレラが待っていた。

「話をついたのかなかな？」

僕は軽く頷くとフローレラは笑顔になった。

「じゃあ、行こうか。魔王を倒しに……」

僕たちの冒険はまだ始まったばかりだった。

6月の終わり頃のことだった。

つまらない物を毎日繰り返す授業も終わり、放課後の教室は活気づいていた。

久々に東馬と一緒に帰ろうと東馬の席に赴いたが既にそこにはいなかった。

「ああ〜これはまずいぞ……帰ったら恵美になんて言われるか……」

それは昨晚の出来事だった……

「お兄ちゃん、明日東馬さんを家に呼んできて」

俺こと神重大智の部屋にノックなしで入ってきた恵美は唐突に言った。

「明日ってまだ金曜日だぞ？明後日でも……」

「ダメ！明日じゃなきゃダメなの！」

俺が言い終わらないうちに反論してきた。

「なんでだよ。別に用はないし、明日でなくても……」

学生の身分として、月曜日からの連日出勤は大概金曜日には疲れが溜まってしんどいものだった。

「はあ〜？誰に向かって言ってるのかなあ〜？」

私の言う事が聞けないっていうの？ならそれなりの対応が必要らしいわね」

負のオーラを放っている恵美は俺に向かってそんな口で聞いてきた。

「分かった！分かったから……言う事を聞くからさあ」

俺はそう言いながらその場から逃げるように自室へと向かった。

いつからだったろうか……

俺が妹に頭が上がらなくなったのは……

それは1年前の春先だった。

入学し経てだった俺の周りには顔も知らない奴らばかりだった。

あまり馴れ馴れしくするのは好まなかった俺は次第に教室で1人である時間が増えていった。

今の俺からしても、あの頃の俺は荒んでいたような気がしていた。

まあ、それもそのはずだった。

俺が高校に入る少し前に両親は離婚した。

以前から家庭がギクシャクしていたが、まあこのまま持つんだろうと思った矢先の事だった。

離婚の原因は父親の浮気だったらしい。

それで両親はどちらが俺達を育てるのかと口論していた。

リビングでは両親の怒鳴り声が聞こえ、2階では恵美が泣いていた。俺の中のストレスは沸々と溜まっていた。

私は嫌よ。1人じゃあこの子等の面倒を見られないわ。

だから俺は子供なんか産むんじゃないって言ったんだ！

それなのにお前がどうしてもって言うから……
最後まで面倒を見るよ！――

――なんで私が……――

永遠と繰り返される怒鳴りあい。

もうこの場所には幸せの欠片もなかった。
だから俺は言った。

「もう俺はあんた等の世話にはならない。
これからは1人で生きていく」

その言葉を聞いた両親の安堵の表情に若干苛立ちを感じた。
しかし、俺は必死にそれを押さえつけた。

せめて最後くらいは笑って過ごしたかった……

中学最後の卒業式には誰も来なかった。

そしてその翌日、俺は我が家を後にした。

俺は両親がくれた最後のプレゼントへと向かっていた。

「ここか……」

あまり新しくないアパートだった。

1人暮らしをするに当たってどうしても必要だった。

そこは両親も認めてくれ、部屋を借りてくれた。

最後に話した時、恵美の話を聞いたがどうやら恵美は母親に引き取られる事になったらしい。

それからほどなくして父も家から去っていった。

そんなこともあり、高校入学当初の俺は荒んでいた。

アパートから実家まではさほど遠い距離ではなかったので、そのまま受験した高校に通うことにした。

すでに俺は周りにいる人間を信用しなくなっていた。
そして事件が起こった。

入学式から2週間後の体育の時だった。

その日はバスケットをすることになっていた。

うちの高校の体育は2クラス合同体育であった。

運動は昔から得意な方だった。

俺はチームで割り振られたポゼッションへと移動した。

試合開始早々、俺はボールを掴んでドリブルを始めた。

次々と得点を稼いでいき、前半を折り返し後半に入った。

俺は前半戦同様、ボールを取るとドリブルを始めた。

と、そのときだった。

——ドンッ——

突然世界が反転した。

何故だか分からなかったが、D組の連中からは笑い声が聞こえた。

俺は足をかけられたのだと理解した。

「なにこけてんだよ。てか、人にぶつかったんだから謝るのが普通じゃね？」

後ろから笑いながらそんな声が聞こえた。

俺は振り返り、こいつが足をかけたのだと分かった。

「てめえ〜！」

俺はそいつに近寄った。

が、その前に周りを囲まれた。

「お前が突っ込んできたんだろ？俺は被害者だぜ？」

分かったらさつさと土下座でもしろよ！」

そう言うのを待っていたかのように囲んでいた3人が俺を押さえ込んで床に倒した。

「くッ……」

そんな俺の姿を笑いながら見ていた連中にも怒りを感じたが、それ以上にクラスの連中に怒りを感じていた。

クラスメイトがこんなになっっているのに、連中はただ見ているだけで何もしようとしなかった。

関係ない……

そんな事を思っているんだろう。

俺は人間なんてこんな物だと思った。

所詮自分に無関係な事には関わらない……

自分に得があることしか行動しない……

だから俺は人間が嫌いだった。

それは両親にも当てはまることだった。

自分の利益にならないから子供などいらないと言った父。

これからの人生で荷物になる子供を引き取りたくないと言った母。

俺はそんな世界が嫌いだった。

こんな世界、早く終わってしまえば……

そう思っていた。

しかし、その考えは違うのだと俺は次の瞬間理解した。

「大智に何やってるんだ！」

そんな声が聞こえてすぐに俺を押さえつけていた1人が吹き飛んだ。俺はこの状況に思考が付いていけずにボーッとしていた2人を跳ね除け、殴り倒した。

先ほどの人は誰なのか気になった俺は後ろを見たが誰もいなかった。

「お前か？さっき大智の足をかけたのは」

すでにその少年は先ほど足をかけた男の所にいた。

「はあ〜？お前誰だよ？おめえには関係ねえよ」

男はそう言つと少年を突き飛ばした。

確かにこの少年は俺に関係していなかった。

それなのになんで……余計な事をしなければいいのに……

俺の思いは瞬時に砕け散った。

「関係ないわけないだろ！大智は俺のクラスメイトだ！こんなことをする奴は許さない」

そう言つて少年は男を殴った。

俺はただその場に立ち尽くしていたが、気が付くと俺を取り押さえ
ていた3人が立ち上がった。

「お前、調子に乗るなよ！？」

3人は俺に殴りかかってきた。

俺は目の前の状況で手一杯だった。

そんな時……

「お前達、何やってるんだ？」

先ほどから姿が見えなかった教師が体育館に入ってきた。
ほどなくして俺たちは職員室に連れて行かれた。

「――入学早々、派手にやったなあ？」

俺は少年と共に職員室の一角で担任の葛城先生に説教を食らっていた。

この時、ようやくこの少年が同じクラスなのだと知った。

先ほどは言っている事がよく聞こえなかったため、この事実は知らぬままだった。

「僕は正しいことをしたと思います。

友達がやられている時に指を咥えて見てもらえません。

罰ならなんでも受けますけど、僕は正義を行ったと思っています」

少年はまっすぐな瞳で葛城先生を見ながら言った。

「でもな並川、確かにお前の言い分も分かる。

が、いつでもそれは正しいとは限らないんだぞ？

現に今だってこんなことになっちまったんだから……」

葛城先生は真剣に並川という少年と話していた。

「お前もだぞ？神重。

どんな理由があつたにしろ、殴りあうのはあまり利口なやり方じゃないよな？」

俺は「はい」と答えただけで口を閉じた。

そんな姿に呆れた葛城先生は最後にこう言った。

「このことは職員会議で取り上げられるから、態度が決まるのは先になる。」

だから今日は帰って自分がやったことを思い直せ。
いいな？」

その後、俺と並川は職員室を後にした。

「怪我とかしなかった？」

廊下を歩いていると並川は俺に話しかけてきた。

「ああ……けど、なんであんなことしたんだ？
お前には関係のないことだったのに……」

口にしてから後悔した。

飯にも助けてくれた奴なのに俺は……

そう自責していると並川は口を開いた。

「確かにね……僕はまだ1度も大智と話した事なかったのにね……
けどなんでだろう……」

その時は助けなきゃって思っで、気が付いたら1人殴り飛ばして
いた。

笑っちゃうよね……

でもね、僕は目の前でクラスメイトがやられているのを易々と見て
いられるほどお人好しじゃないと思う。

それも、自分の身も顧みないで……」

俺はこの時思った。

こいつなら……こいつなら信じられるかも……と。

それから俺は東馬と一緒にいることが多くなった。

3カ月が過ぎ、夏休み入るとほぼ毎日東馬を家に呼んでいた。

東馬も夏休みの予定など何も考えてないと言っていたので必然と家

に来るのが日課になっていた。

「あちいゝ……」

小さい部屋に男が2人いるだけで室温が3度高いような錯覚に陥っていた。

「そういえばさあゝ、4月に俺に足かけてきた奴自主退学したらしいぞ」

その頃には学校一の情報通となっていた俺は思い出したかのように東馬に話しかけた。

「へえゝ、確かあの後あいつ等がやったと皆の証言で僕たちは不問に終わったけど、あいつ等は確か……なんだっけ……？」

「停学処分だろ？さすがに学校の面子もあるから退学まではいかなかったみたいだけどな……」

何しろうちの高校は県屈指の進学校だから、こんな事件さえも闇に葬りたいと思っていたが流石に事件そのものを無くしてしまうのは後々厄介だと考えた校長は仕方なく停学処分を下した。

「なんかねえゝ、まあ仕方が無かった事だとは思っけど……
けど、あいつ等のお陰で今の僕たちの関係があるんだから少しは感謝しないかね？」

東馬は笑いながらそんな事を言っただけで、その時だった。

——ピンポーン——

「ん？だれだ？こんな時間に……」

時刻はまだ午前9時を回ったことだった。

俺は東馬との話を止めるとゆっくりと立ち上がった。

「どちら様ですか？新聞なら要りませんけど……」

そう言いながら俺はドアを開ける。

するとそこには長年よく見ていた顔があった。

「こんな所にいたんだあゝお兄ちゃん。ご機嫌麗しゅう？」

上品な口調とは裏腹に閉めようとしたドアをガッチリ掴んでいた。

「め、恵美……なんでお前がここに……」

「そんなの決まってるでしょ？お兄ちゃんが心配になって……」

それにあんなところに私を置いていって1人だけ逃げ去るんですもの。

心配になって当然じゃないの？」

こめかみ辺りをヒクつかせながら恵美は言った。

「いや、あれはまだ俺が中学卒業してなかったから一緒に住むのは流石に奴等も認めてくれなくて……」

それに家計が安定してから迎えに行こうとおもっていたんだけど……

……」

俺の必死の言い訳も意味を成さず、恵美の苛立ちは最高潮に達しようとした時だった。

「大智、誰と話してるの？」

部屋の奥から東馬が出てきた。

「お兄ちゃん、あちらの方は……？」

恵美は東馬の存在に気が付き、興味がそちらに向いた。そのお陰で恵美の苛立ちも徐々に薄れていった。

「ああ、彼は……」

俺が恵美に東馬を紹介しようとしたが、それは後ろから聞こえてきた声に阻まれた。

「東馬、並川東馬。君は……？」

俺は振り返って声の主探したが、この部屋にいるのは2人しかいなかった。なので必然と特定された。

全く、俺の役割がなくなってしまうじゃないか……

「私は神重恵美。この人の妹です」

仮にも兄である俺をこの人呼ばわりしたことに一瞬口を出そうかと思っただ、話はそのまま流れていった。

「そうなんだあー！君が恵美ちゃんか。」

大智から話は聞いていたよ。それよりも大智、話とは違い予想以上

に可愛くてビックリしたぞ！」

「まっ、まあそういうことは部屋の中で……
と言う事で恵美も上げれよ」

2人の間に挟まれて結構居心地が悪かったので、恵美にそう催促した。

「そうね。じゃあお邪魔しようかしら……
とその前にお兄ちゃん、ちょっと……」

恵美は俺を手招きすると外へ連れ出した。

「なんだよ？別に部屋でもよかったんじゃないか？」

恵美は俺をアパートの階段の下まで連れてきた。

因みに俺の住んでいるアパートは2階建てで、俺の部屋は2階の真ん中よりやや奥の203号室だった。

「まあ、部屋でも話せることもあるんだけど……」

それより、お兄ちゃん。東馬さんってカッコいいよねえ。

というわけでお兄ちゃん、私と東馬さんとの間を取り持つてよ！」

突然の告白に戸惑いが……

なんてことを考えてたらもの見事に予感的中した。

「バツ、バカなことをいうな！」

なんで俺が……そんなこと出来る訳……

第一俺にはそういうのは向いてない。自分でなんとかしろよ」

俺は恵美にそう言つと恵美はニヤニヤしながらこう切り出した。

「私を置いていったのに……私にまだそんな事が言えると思つてるの？」

お兄ちゃん、私を置いていった事に罪を感じてるでしょ？

だからお兄ちゃん、私の願いを聞いて罪滅ぼしをしてもいいんじゃないのかなあ？」

うッ……

とてつもなく痛いところを突かれたような気がした。

確かにあの一件で俺はそれなりの罪を背負つたと思う。

だからいつかきつと恵美に良い思いをさせてやりたいとは思つていたが……

「やつぱり俺には……」

「まだそんなこと言つてるの？」

妹のお願いなんだよ？聞くのが絶対なんだよ？」

そんな会話をして5分後……

結局俺は恵美と東馬との仲を取り持つ事になった。

なんだか上手くまとめられたような気が……

そして話が終わったので部屋に戻ろうとしたときだった。

「あつ、言い忘れてたけど明日からお兄ちゃんには家に戻つてもらうことになったから」

一難去つてまた一難。

まさにその言葉の意味を知つた瞬間だった。

「はあ？んな……いまさら戻れるわけ無いだろ？
母さんになんか合わせる顔は無いよ……」

俺はうつむきながら恵美に言った。

「そういうことじゃないの。」

お母さん、病に掛かつちゃって今お母さんの実家で養成中なの。
で、私も一緒に着いて行くっていう話が出たんだけど、部活ある
から一緒にいくことは出来ないって言ったの。

そしたらお母さんがお兄ちゃんの住んでるところ教えてくれて、お
母さんが戻ってくるまで一緒に暮らさなさいって……」

恵美は溢れそうな涙を必死に堪えながらそう告げた。

「かつ、母さんが……」

恵美……今まで辛かっただろ……
分かった。すぐに引越しの準備を……」

俺は一目散に部屋へと向かった。

部屋では東馬がお茶を飲みながらテレビを見ていたところだった。

「ん？話は済んだの？」

東馬はのんきにそんな事を言っていた。

「東馬、悪いんだが手伝ってくれないか？」

俺は東馬に事情を説明すると東馬は立ち上がるところ言っただ。

「水くさいこと言っつなよ！俺達親友だろ、大智？」

東馬は笑いながら、引越しの準備を手伝ってくれた。
そして翌日、俺は5ヶ月ぶりに実家に戻った。

そんな過去があり、いつしか俺は恵美に逆らうことが出来なくなっていた。

「はあ、東馬どこいったんだよ……」

というわけで俺は教室を見渡すも東馬はもぬけの殻だった。

「並川くちよつと付き合って……ってなんで神重がいるんだよ？
てかいつの間に……」

そう言いながら近づいてきたのは席替えをしてごく最近となりの席になった……

「おう、友人A。お前も東馬に用事か？」

「友人Aって……僕の名前は山田なんだけど……」

友人Aこと山田は困った表情を浮かべていた。

「おうおう、分かってるって！谷口よ。

ところで谷口の東馬に用があるなら付き合えよ！」

「だから、山田だって……てか谷口って誰？」

そんなこんなで友人Aと一緒に並川家へと向かった。

——ピンポン——

「はあゝい」

俺と友人Aは並川家に付くとインターフォンを押した。

中から声が聞こえてきたという事は既に東馬は帰っているのか……？
と思いつつ俺等は外で待っていた。
すると……

「あれ、大智先輩。久しぶり〜」
今日はどうしたの？」

中から現れたのは瑞葉ちゃんだった。

「ああ、親愛なる……うぐッ……」

そう言えばこいつは瑞葉ちゃんの崇拝者だという事を忘れてた……
そんなわけでしばらく黙ってもらおうか。
俺は友人Aのわき腹にすばやく手刀を入れた。

「おい、大丈夫か？谷口。」

そういえば瑞葉ちゃん、東馬の奴はもう帰ってるのか？」

付き添いの奴はスルーして本題に取り掛かることにした。

「お兄ちゃん？お兄ちゃんならもういるけど……
たぶん部屋にいますと思うから上がってよ」

「そう？じゃあ、上がらせてもらつよ」

俺は友人Aを担ぎながら東馬の部屋へと向かった。
が、しかし部屋に入ったものの東馬の姿はどこにも無かった。

「あれ、トイレかなあ？」

まあいいや。ってこれは……」

俺はふとテレビに目がいった。

「懐かしいなあこのゲーム。

東馬の奴こんなゲームをまだやってたのか。

どれどれ、確かこのゲームには裏技があったような……」

俺は頭の片隅に眠っていた記憶を呼び起こすとコントローラーを持った。

上、下、○、右、□、左、×、下、上……

それを押し終えると俺はゲームの最初からを押した。
すると……画面に文字が流れた。

『ここは魔王によって支配される世界。
あなたにこの世界は救えますか……？

YES / NO』

「これはゲームの引っ掛けで、実はNOが裏技なんだなあ」

俺は迷わず『NO』を選択した。

『———』

長い沈黙の後になにやら画面が渦巻き始めた。

「えっ、こんなだったっけ？

って、なんか引き込まれてるような……」

そう思ったのも嘘ではなかった。

実際に俺の体はテレビ画面の中に飲み込まれていた。

俺は画面に引き込まれる寸前で友人Aの服に手がかかった。

助かった……

と思ったが、意識の無い友人Aもそのまま引き込まれてきた。

「ちよつと、待てよ……」

谷口、お前まじで使えねえ！」

そして俺等は暗闇に落ち込んだ。

第15話 終焉の使者

「……で、これからどうするのかなかな？」

とりあえず街から出たはいいものの、この先の事は何一つ考えてなかった。

「そうだなあ……」

まあ、とりあえず魔王倒しに行っちゃう？」

そんなのりで旅を続ける事5時間……

「なあ、フローレラ。一つだけ聞いていいか？」

「なに？」

「ここは……どこなんだあ！？」

地図も持たず、己の直感を信じて歩き続けた結果、当然のことながら迷子になった。

「しらない。誰かに聞いてみたら？」

フローレラはのんきな事を言っているが、実は2時間ほど前から徐々に草が茂り始めたと思っていたらいつの間にか森の中にいたのであった。

つまりは、聞きたくても森の中なので人一人見当たらないというわけである。

「誰かって……誰もいないじゃないか」。
こんな時に便利は魔法があればなあ……
って、あれ？何か忘れてるような……」

魔法……

そういえば、この世界に来てから魔法を見た事は一度も無かった。

「なあ、フローレラ。この世界には魔法ってあるのか？」

疑問に思っただけですぐに行動。

小学生の時によく先生が口に使っていた言葉だった。

「魔法……？ある事はあるけど……」

「けど……？」

なんだか暗い雰囲気になってしまった。

まずい……変な事を聞いてしまったか……？

僕は俯いたフローレラの顔をそっと覗き込んだ。
すると……

「使い方を忘れちゃった」

この時初めて僕はこの子に怒りという物を感じた。

「忘れたって……それはないだろう」。

なにか一つくらい覚えてないのか？

ほら、街に瞬間移動できる魔法とか……」

流石にこれは贅沢か。

そう思っていたが……

「あつ、それなら知ってる」

「なぜ早く使ってくれなかった。

そうすればこんな目には……」

少々愚痴を溢しながらも、フローレラに魔法を使ってもらう事にした。

「じゃあ、行き先は南の街にしよう」

そう言うところからフローレラは呪文らしき物を唱え始めた。

そして次の瞬間、僕は体が浮上する感覚に陥りながら僕等は時空を移動した。

「痛つてて……ここは？」

目を開けるとそこは薄暗い道の上に僕等はいた。

「あちやあ。失敗しちゃったみたい」。

「ごめんね」

うう……若干フローレラの可愛さに許す気が起きてしまった。

「って、許されるわけ無いだろう！

まあ、頼んだのは僕だったから失敗しても仕方なかったけど……それよりフローレラ、ここはどこなんだ？」

一刻も早くこの薄気味の悪い場所から出たかった。

「ええ〜と、ここはね〜確かね〜」

「確か……？」

「魔王城だったようなあ〜」

……

なんだか一気に気温が下がったような気が……

「……なんだって？」

「だから、魔王城だったようなあ〜」

やってしまった。

楽をしたさに早まった真似をした僕は後悔していた。

いくらなんでも街を出てからまだ1体も魔物を倒してない僕が魔王なんか倒せるわけが無い。

まあ、ゲームの話で言つとLv1の勇者が始めの街を出た草むらでLv80の魔王が野生で現れたくらいの状況が今だったりする。

「ちょっと僕用事が……」

そう言つてこの場を去ろうとした僕をフローレは後ろからしっかりと捕まえていた。

「そうよね〜。今こそその用事を……魔王を倒す宿命を果たす時だよだよ！」

なんか知らないけど、フローレラは1人で勝手に盛り上がっていらつした。

それによく考えて見れば、まだ

パーティーは2人しかいなかった。

それもLv1級の……

「そうだね……一瞬でけりが付くと思うよ……僕の死で」

「まあまあ、楽しくはりきっていいお〜」

そう言いながらグイグイとフローレラは僕の背中を押してきた。

その行為が実はこの人が魔王なんじゃないかと思うくらい僕は恐ろしく感じていた。

「悪魔だ……」

仕方なく背中を押え続けられること30分、僕等はどうやら広い場所に出てきたらしい。

そこはこの建物の中でもまだ明るい方で、日の光が差していた。そしてその奥に奴はいた。

「待っていたぞ。勇者『東馬』よ……」

「でっ、出たな！魔王」

僕は咄嗟に街の武器屋のおじさんから貰った武器に手をかけた。

「このピコピコハンマーが相手だ！

……ってなんだこれ〜？あのくそ親父め……」

ようやく戦おうと気合を出したのに、空回りさせられた。
今度会ったら覚えておけよ……
密かに復讐心を心に宿しながらも、頑張ってその場を取り繕うことにした。

「ははは……貴様があまりにも弱そうだから出す物を間違えてしまった。

次こそかならず……

くらえ！これが本当の勇者の剣だ！

行くぞ、うまい棒！」

「ぶ。ぶ。ぶ……」

くそッ……

よりによってフローレラに笑われてしまった。

というか、これを仕組んだのはフローレラしか思い当たらなかった。

しかもよりによってうまい棒とは……何たる屈辱。

それよりも、先ほどから魔王は無反応だった。

「ふっ、おやつは500円まで。

これ遠足の鉄則なり！

というわけで、行くぞ魔王。

仏の顔は3度まで、お前の顔は見えないがもう見飽きた！

いでよ聖剣、『綺麗におちる』！

ってこれ石鹸だし！言葉似てるけど聖剣じゃないから。もういいからね、フローレラ」

「ごめんごめん。

だけど東馬って意外と才能あるかも♪」

そういうわけで、もう一度仕切り直すことにした。

「でっ、出たな！魔王」

僕は腰にある剣に手をかけた。

「さあ、掛かってくるがいい！」

ようやく通常の反応を示した魔王によって1人で勝手に感動していた。

だが、今は敵同士……情けは無用。

「くらえ、たつた今思いついた究極最終奥義！」

自分にできることをする。

中学生の時、よく先生がそんなことを言っていたのを思い出した。
やるよ先生……僕、精一杯やるから！

「『神々（ゴッド・オブ・）の旋律』^{ザ・スコア}！」

やったよ先生……自分で出来うる力を使い果たしたよ。

僕は叫ぶと同時に目にも留まらぬ速さで剣を抜く。

カチッ……

その剣が鞘に収まる音が鳴ると同時に魔王はその場に倒れる。
そんな風景が頭の中で浮かんでいた。

「おおー！カッコいいじゃないか。これなら僕も伝説に……
はッ、何をしていたんだ僕は……」

幻想は幻想でしかなかった。

「その程度の攻撃で我を倒せるとでも」

「いや、まだ一撃も入れてねーし」

聞きなれない声が僕等の後ろから聞こえてきた。

「この声は、まさか……」

そこに現れたのは知らない人間だった。

いや、知ってはいたものの誰だか分からないだけか……？

「た、谷口！？」

「だから山田だって！何度言わせれば気が済むんだよ」

当たった……

適当に言ったらどうやら当たりだったらしく、谷口は僕に近づいて来た。

ここはうまく話を合わせた方が得策だと考えた僕は咄嗟に行動を取った。

「やれやれ、危つく先に倒してしまう所だったぞ！」

「えっ、まだ一撃も与えてなかったのに……？」

うう、なかなか痛いところを付いてくるじゃないか……
だがこんなところで負ける僕ではない！

「まあいい、手をかせ！谷口」

僕は走りながら魔王に剣を向けた。

しかし、それはあまりにも馬鹿げた行為だったと後から気づいたが既に遅かった。

「こしやくな……死ぬがいい勇者よ！

ダーク・デス・ソード
『究極暗黒剣』」

そう言いながら放った魔王の一撃が僕に迫ってきた。

光の速度で飛んできていたが、僕にはそれがコマ切れ映画のようにしか見えなかった。

徐々に近づく斬撃に僕はそのまま死ぬのだと思ったそのときだった。

バキンッ……！

いきなり目の前にそれが現れると刀で魔王の斬撃を防いだ。

「間に合ったようだな……

無事か、東馬！」

「だ、大智か……？助かった」

魔王の斬撃と僕の間立ったのは大智であった。

「貴様、よくも俺の親友を……許さん！」

「だ、大智じゃ無理だよ！勇者の僕でさえ倒せないんだから……」

「俺を誰だと思ってるんだ？この神重大智が知らぬゲームの攻略法

など1つもないさあゝ！」

大智はそう言いながら魔王に突っ込んでいった。
そして……

「ばっ、馬鹿な……我が負けるなどありはしない！
この因縁、忘れはせぬぞ……」

そう言いながら魔王は大智の手によって倒された。

第16話　そして日常世界へ……

勇者の手によってではないものの、意外とあっさり魔王は倒されてしまった。

「……魔王弱ッ！」

魔王が弱いんだか、大智が強いのだか分からぬままことが終わった。というかこんな雑な終わり方でいいのか？

なんて思いながらも、これでようやく現実の世界に帰れるという喜びがあった。

「ハハハ……噂に聞くほどの強さじゃなかったな！」

別に何をしたというわけでもない、というよりも何もしていない奴が後ろで騒いでいた。

「お前、何もしてないし……
ってか何しに来た!？」

痛いところを突かれたのかその後谷口は黙り静まった。
と思いきや……

「お兄さん、瑞葉ちゃんを僕に下さい！」

突然の出来事に何を言っているのか分からなかったが、とりあえずこう告げておいた。

「ついに頭までおかしくなったか……可愛いそうに」

それでも後ろで何か訴え続ける谷口をスルーし、大智の元へ向かった。

するとそこではフローレラと大智が会話をしていた。

「ああ、貴方は賢者様なのですね……」

勇者様と賢者様と魔術師と……誰でしたっけ？」

「まあ雑魚ってことで……」

「なるほど！けど、なんだかイメージ悪くなるんで消去つと」

『そうして3人は世界を救った！』みたいな感じでいいんですか？」

「好きにしてくれ」

なにやらよく分からない会話をしているようだが、僕には直接関係し無そうなので関わらないことにした。

それよりも今後のことについて話したいと思っていたのだが……

「雑魚はないよってか消去つて……」

そうそう、結婚した後の話なんですが……」

あまりにもしつこく着いてくる谷口を黙らせるため、目に見えぬ速さで剣の鞘で腹部を強打した。

「うつ……」

そのまま谷口は意識を失った。

そして僕は話の本題に戻す事にした。

「なあゝ大智、この世界から脱出する方法無いのか？」

大智はフローレラとの会話を中断すると、僕に言った。

「まあ、無い事はないんだがな……」

結構めんどくさいんだよ。

なんて言ったってこの世界の五大聖獣に会わないといけないんだからな」

「聖獣？聖獣ならもう契約しちゃったけど……」

ダメだったのか？」

それを聞いた大智はすごく驚いた表情を浮かべたが、すぐに元の顔に戻った。

「なら話は早い！

聖獣との契約が済んでいるんなら召喚し、願いを言えば元の世界に戻れるぞ！」

それを聞いた僕は喜んだ。

なんだ…… 案外簡単なことじゃないか！聖獣を召喚するだけなら…… 召喚するだけ……？

思い起こせば未だに一度も聖獣を召喚した試しが無かった。

「大智…… どうやって聖獣を召喚するんだ？」

僕はこれまでの経緯を大智に説明し、聖獣を召喚したことが無い事を伝えた。

「お前…… よくそんなでここまで辿りついたな……」

「まあ、フローレラの魔法でちよつとね……」

「はあく、じゃあ説明するからその通りにするんだぞ！
まずは『我、ここに刻む。紋章は光。今、ここに召喚せんを欲す』
だ。」

大智の言ったとおり言葉に述べる。
すると急に左目が疼き出した。

『僕の意味は君の望むままに……』

そんな声が聞こえると、辺りが光で満ち溢れた。

「なつ、なんだ？」

一瞬眩んだ目が徐々に戻り始めた。
そしてそこにいたのは見た事もない者だった。

「これが、聖獣『ゼクサス』……」

『僕の望みは既に叶った。
契約によって君の願いを叶えることにしよう』

僕は聖獣の姿に目を奪たわれていた。
馬のような姿に黄金の鬣たてがみ、そして背中には真つ白な翼が生え、頭部
には輝かしい一本の角ユニコーン。
その姿はまさに一角獣ユニコーンそのものだった。

「君の願いはなんだったんだ？」

急にゼクサスの言った事が気になり訊ねてみる。

『僕の願いはこの世界の秩序の維持さ。』

以前は僕たち五大聖獣と創造主が世界に影響を与える唯一無二の存在だった。

しかし、1000年前に大邪神が復活し世界のバランスが一度揺らぎかけたんだ。

それでも僕たちは戦いそして勝利した。

だから今まで平和でいられたんだけど、今度は魔王の復活……

魔王を倒す事が僕の願いだったんだ。

そしてそれを倒した君には願いを叶えられる資格があるんだよ』

「けど、僕が直接倒したわけじゃない……」

だから僕にはその資格は……」

『うっん、違うよ。』

君が倒したじゃないことは分かってる。けど君とその仲間がやったことじゃないか。

契約を果たされたのは変わりないさ』

ゼクサスの声は僕の心を落ち着かせてくれた。

母の御腹の中にいるような温かい感じがしていた。

『さあ、君の願いを……』

「僕の願いは……もとの世界に戻ることだ!」

『その願いを叶えよう。』

元の世界に戻るのには3人でいいんだよね？

なら僕が作る魔方陣の中へ……」

その声の後、僕の近くの地面に何かの紋章が浮かび上がった。僕等はその声に従いその紋章の中へ入った。

『じゃあ今から元の世界に空間移転するから外に出ないように。この世界を救ってくれてありがとう。そしてさようなら……』

地面に描かれた紋章は光を放ち始めた。とそのとき僕はあることに気が付いた。そっいえば谷口がまだ……

僕は紋章の外を見るとそこにはまだ倒れたまま伸びていた谷口がいた。

じゃあ、ここにいる3人目って……

「なっ、なんでフローレラがここにいるんだよ!？」

「ええ、だって面白そうだったんだもん」

「面白そうって3人しか帰れないんだぞ。谷口はどうすんだよ!」

僕は慌てて谷口を迎えに行こうとしたが、その行動を大智が止めた。

「もう間に合わない。東馬、彼のことは諦めるんだ!」

「ダメだよ。仲間を見殺しになんて出来ない!」

「よく聞くんた東馬。」

彼はうちの学校の『瑞葉親衛隊』の第一人者であり、熱狂的な瑞葉

信者だ。

最近では姿を見せずに影ながら行動をしていたものの、着々と力をつけている。

そんな彼がいなくなったらどうなる？

親衛隊の第一人者がいなくなれば親衛隊だって自然崩壊さ。

それに東馬への被害もなくなる。

東馬だって気が付いていたんだろ？

最近になってやけに変な人が自分の周りに増えた事くらいはさ」

だ、ダメだ……それでも仲間は……

と思いつつも、居なくなれば……

そんな2つの思いが激しく交差しあつた結果……

「……これも仕方ないことなんだ。置いておこつ」

そして僕等は光の渦に吞まれていった。

気が付いたら僕等は僕の部屋にいた。

「帰って来たのか……？」

するといきなりドアが開いた。

「もー、お兄ちゃんつたらどこに……
つてあれ？お兄ちゃん！？」

そこに入ってきたのは瑞葉だった。

「どうした？瑞葉。」

「そんなところに立ってて……」

「そうだ、大智たちにお茶でも出してくれないか？」

「あ……うん。分かった」

「そういうと瑞葉は僕の部屋から出て行った。」

「なんとかバレずに済んだみたいだ……」

「そう思った矢先。」

「そつえばお兄ちゃん、その人誰？」

「大智先輩と一緒にきたのは違う人だったような……」

「その人……？」

「僕は辺りを見回すと大智とそこにはフローレラがいた。しまった……フローレラが付いてきてたんだ……」

「慌てた僕は急いで大智にアイコンタクトをとった。」

「すると大智が瑞葉に説明し始めた。」

「これは……その……そう、彼女は男装が趣味なんだ。」

「瑞葉ちゃんも騙されちゃったでしょ？」

「へえ、そうなんだ……」

「なんとなく納得した様子でなんとかその場を切り抜けることに成功した。」

「じゃあ、悪いんだけど俺達はそろそろ帰ることにするわ。今日はありがとう」

そう言つと大智はフローレラの手を取つてその場から立ち去るように逃げた。

まあ、実際のところ話がややこしくなる前に居なくなつた方が言い思つていたので僕としても好都合だつた。

「もう帰つちやうの？まだ来てから15分も経つてないよ……」

なんと僕等が次元移動してから帰つてくるまで十数分の出来事だつたらしい。

「ああ、用事はもう済んだしな……」

それにあんまり長くお邪魔してると、東馬と瑞葉ちゃんの2人っきりの時間が短くなつちやうものだからね。

じゃあ、またね」

いらぬ置き土産を残し、大智らは帰つた。

その後の出来事は言うまでも無く、大智の言葉のせいで僕の3連休は休む間も無く夢く散つていった。

後日大智に聞いた話だが、どうやら大智は恵美ちゃんとの約束を忘れてたためその夜は酷い目に合つたと言つていた。

それは僕に置き土産を残していった罰であると僕は勝手に解釈した。変わらぬ日常……

それもまた平和なのだと僕は密かに感じていたりするのであつた。

第17話 生徒会とアルバイト

「私、生徒会に入る事にしたから」

一昨日の朝食時に突然瑞葉が言い出した。

もちろん僕は反対したが、登校時間が来てしまいそのまま話は途切れてしまった。

それから何とか瑞葉を説得して見るものの、効果なし。

そんなこんなで遂に7月10日の立候補日が来てしまった。

「はあ、どうしたらいいんだよ……」

時刻は既に12時を回っていた。

タイムリミット
制限時間まであと4時間を切っていた。

この3日間はあらゆる作戦を考えてきたが、どれもこれも無駄に散っていった。

とりあえず始めは瑞葉を説得しようとしたが失敗。

次に他に立候補者を出そうとするが、瑞葉の人気を考えるとあつさりと碎け散りそうなので廃止。

奥の手と思い成瀬や若嶋に頼むも拒否されてしまった。

全ての策を使い切った僕は今こうして大智に相談をしているのであったが……

「別にいいんじゃない？瑞葉ちゃんがやりたいって言うてんだったら俺には東馬が阻止しようとする行動が分かりかねるが……」

確かに周りから見ればそう思われても当然のことだった。

しかし、この行動は僕にとっては今後の学校生活に関わることであった。

「いいか、大智。

もし瑞葉が生徒会に入ったとしよう。

そうしたらどうだ？学校での権力的には僕等一般生徒なんかよりは断然高くなるだろう？

そんなことになったらその権力で僕に何をされるか分かった物じゃない。

例えば、いきなり僕に不利な行事が入ったり……」

そこまで言って本当に起こりそうな予感がして体に悪寒が走った。

「確かにお前にとっては最悪だな……

だが、本当にそんなこと起こると思うのか？

まあ冗談でなら言いそうだが……

結局のところそんなに瑞葉ちゃんが生徒会に入るのが嫌なら、お前も一緒にやればいいじゃん」

そッ、そうか！そういうことだったのか……

大智の助言にすっかり耳を傾けてしまっていた僕には不可解な笑みを浮かべる大智に気付くはずもなかった。

そして放課後……

「というわけで私、並川東馬は生徒会副会長に立候補します」

突然の宣言に戸惑いを生徒会室の面々は隠せないで居た。そして同じく立候補を告げに来ていた瑞葉も同様だった。

「な、なんでお兄ちゃんがここにいるの！？」

「それはだなぁ、お前の悪巧みが遂行されないように……じゃなく、この学校をよりよくするためにこの身を捧げたいと思ったからだ！」

あからさまに不自然な発言だったので、周りは疑念の目で僕を見ていた。

それでも瑞葉さえ騙せれば良いと思っていたのだが、瑞葉も僕の言葉に疑いを持っていた。

「悪巧み……？なるほど……そういう手があったか……」

し、しまった！無駄な悪知恵をつけてしまった。

どうやらこの行動は失敗だったようだ……

そう思っ、て潔く帰ろうとしたところを生徒会の顧問に捕まった。

「知ってるとは思っ、けど、立候補は取り消せないからな」

「えっ……マジっすか……」

こうして僕は諸事情により生徒会に立候補することになってしまった。

その日の帰り道……

「はぁ、どうしたらいいんだよ……」

僕は学校が終わるとそのままバイト先に向かっていた。

「まあ、仕方ないじゃないですか？先輩、ここは男らしく受け入れるしか……」

隣にいるのは同じクラブの若嶋である。

大智に紹介してもらったバイト先で偶然にも若嶋に会った僕はその後、同じシフトの時はこうして一緒に行っている。

そして僕にとっては大切な相談相手にもなっていた。

「それはそうなんだけどな……

なんで今年に限って定員ギリギリなんだよ！

例年なら生徒会って言ったたら内心あげるとかなんかで激戦なのに……失敗したら手を抜いて落選しようかという企みが……」

そう考えた上での実に計画的な行動だったのに、こうも運がないと涙すら出てきそうだった。

「というか並川先輩は瑞葉ちゃんのどこが嫌なんですか？
可愛いし、優秀だし、運動も出来るし……非の打ち所がありませんよ」

いやいや、それ以前に兄妹だし……

妹を好きになるとか現実じゃありえないし……

なんて思いながらも、なんかからかわれてる感じがしたのでそのまま聞かなかった事にする。

「そうはそうと、今日バイト終わったら時間ある？」

その言葉を聞き若嶋は疑いの目を僕に向けた。

「な、なんですか！？瑞葉ちゃんだけじゃ物足らずに今度は私ですか？」

「んなわけないだろ！ちょっと買い物に付き合っただけだよ。」

「ってか若嶋ってこんな性格だったっけ……？」

少し若嶋の事が分からなくなった僕に若嶋はさらなる追い討ちをかけてきた。

「そうですか……」。

まあ、並川先輩に告られても断りますけどね」。

だって私にはお兄さんがいますから……」

なんか今聞き捨てならない言葉を耳にしたような……

いやいや、ここで突っ込んだら負けだ！堪えるんだ、僕。

若嶋の揺さぶりにますます若嶋がどんな人なのか理解出来なくなっていた。

「で、結局のところどうなんだ……？」

「あつ、それならOKですよ」

新たな問題を抱えながらも僕等はバイト先に着いた。

僕等が働いているのは商店街にある喫茶店だった。

人氣が少なく、最近ではあまり客が来なくなっていたが僕が働き始めた翌日から若干なブームが沸き起こっていた。

店の定員は4人で、僕等を含め店長ともう1人のバイトがいる。

1週間で3人で代わる代わるやっているが、6月に入ってからほぼ毎日出勤していた。

因みに大智の言っていた可愛い女の子とはもう1人のバイトの子であるが、最近は風邪で休んでいるみたいで若嶋も毎日借り出されたりする。

「はあ、なんかバイト疲れちゃうなあ……」

てかまた最近クラブに顔出してないから柊になんて言われるやら」

とは言うものの、毎週水曜日と日曜日は店が休みなので定期的には休みを貰っていた。

ってかこんなに休業して儲かっているのか？

と思うくらいだが、実際のところここ1ヶ月は前の月の3倍以上の黒字でもあったりする。

「いいじゃないですかあゝ、部長も認めてくれたんだし。

並川先輩は厨房で料理人としての心得を学び、私は接客を学べって言ってたし……」

そう、今こうしてクラブに出ずバイトに出られるのは柊がこれを認めたからである。

『料理人としての腕を磨き、私達に出しなさい！』

口では言わないので本当のところはどうなのかは分かっていないが、こんな思惑だろうと僕は勝手に解釈していた。

「あつ、そうだ。この前考えた新作のケーキ食べる？」

「いいですねゝ、いただきます」

こんな他愛も無い時間を過ごせるのは開店前までだった。

もちろん午前中も店長が1人で経営しているが、僕等が来る時間の前に1度閉まったりする不思議な店だった。

「あつ、こんにちは。店長」

着替え終わった僕等はカウンターに座っていた店長に挨拶をする。店長は普段の事は何をやっても口を挟まない人だが、挨拶だけはし

つまりやらせるといいういかにも大人な人だった。
実際今年で45歳になるらしいが、独身でこの店を切り盛りしていた。

「ふむ、今日もよろしく頼むぞ」

「「はあゝい」」

こうして僕等のバイトは始まる。

下準備を始めてから30分後には再開店し、ソロソロと人が入ってきた。

「3番テーブル、コーヒー1つとフルーツパフェ1つ」

フロアで接客している若嶋の声が厨房に聞こえてきた。

僕は慣れた手つきでパフェを作っていく。

そしてカウンター越しに店長が常連さんと話しながらコーヒーを入れていた。

『世界最高のコーヒーメーカー』

と称されている店長の腕は素人である僕が飲んでも違いが分かるほどだった。

そして今では……

『光速の料理人』

なんて呼び名が僕に付いていた。

「1番テーブルにオムライス3つ、2番テーブルにカレーライス1つとナポリタン1つ」

若嶋の声が聞こえると同時にパフェが完成し、カウンターに持っていく。

およそ3分で仕上がり、次の注文に取り掛かる。

喫茶店のテーブル席は3つしかなく、学校帰りの生徒が座るとすぐに満席になってしまう。

そしてカウンター席は5つあるが、ほとんどが常連さんに取られているのが現状だった。

数が少ない分僕は自分の仕事に集中出来るわけである。

「はい、まずはカレーライスとナポリタン。

オムライスは少し待ってて」

注文を受けてから7分で完成する。

カレーライスは元から煮込んであったが、ナポリタンはその場で作ってしまう。

そして5分後……

「オムライス3つ完成」

少し技術が上^{スキル}がったのではないかと自分でも思っていた。

そして暇になった時間は新作の料理を作ったりしていた。

こんな喫茶店が人気なのは料理が速いのと、とにかく安いということだ。

カレーライスなんかは190円と200円を切る破格だし、デザートは全品150円と学生には嬉しい値段だった。

つてかこんな値段でどうして破綻しないのかが不思議だったので店長に聞いたところ……

「詳しい事は内部秘密だから……」

とはぐらかされてしまった。

まあ、こっちとしてはバイト代さえ貰えれば気にしないところだが

……

そんなこんなで4時半に再開店した喫茶店も7時半には少し早いが閉店してしまう。

「お疲れ様です」

そう店長に挨拶すると僕と若嶋は店を出た。

「で、これからどこに行くんですか？」

「ああ、ちよつと1人じゃ入りづらい店だなあ……」

商店街を歩く事10分、僕は目的の店についた。

「ここって、まさか……」

若嶋は驚きの表情を隠せずにいた。

そう、ここは……

第18話 相手の事を考えて

『エンジェル・ハウス』

主に女性向けの商品を中心として今人気絶頂のブランド店である。

「こんなところになんの用ですかあ〜？」

分かった！誰か女の人にプレゼントを渡すとかですか？」

ううっ、なかなか鋭い洞察力を持っている……

いきなり核心を突かれそうになりたじろいでいた。

「まあ、私に渡しても兄以外からは受け取らないけどねえ〜」

またもや聞き捨てならない言葉が……

いや、考えるのは止そう……瑞葉と同じ匂いが……

生まれてこの方16年、磨きがかかった僕の第6感がそう告げていたからには考えない方がいいのだと逸る気持ちを無理に押さえこんだ。

「で、誰なんですかあ〜？その相手は……」

「えっ、そ、それは……」

正直僕は迷っていた。

プレゼントを選ぶのには相手の特徴や個性などを参考にしないと選べないわけなので、言わなければならないと思っていた。

だが先ほどの若嶋のテンションと言った翌日には噂として広まってしまう可能性があまりにも高すぎた。

「それは？」

ニヤニヤしながら近づいてくる若嶋から逃れようとしていたが、既に背中では店の壁についていた。

絶体絶命

まさにその言葉がこの状況を表していた。

万事休すか……

そう思った矢先だった。

「あれ、ゆうしゃ……じゃなくて東馬さんではないかなかな？」

「ちょっとフローレラさん走ったらあぶな……えっ、東馬さん！？
な、な、なんでこんなところに……」

そこに現れたのはまた不釣り合いな2人だった。

そうそう、例のゲームの世界から抜け出てきたフローレラを連れて家から去った大智は仕方なくフローレラを大智の家で引き取る事にしたらしかった。

当然のことながら大智の家には恵美ちゃんがいたが、大智は『ホームステイに来たフローレラ』と言う名目で恵美ちゃんを説得したようだった。

始めのうちは慣れない生活が続いたが次第に打ち解けあい、今では恵美ちゃんとフローレラは姉妹のような仲になっていると僕は太智から聞かされていた。

「おお、フローレラに恵美ちゃんじゃないか。

偶然だね」。元気にしていた？」

危ういところで若嶋の詰問から逃れる事に成功した僕は慌てて2人

に話を振った。

しかし、突然のことだったので2人は話についてこれてはなかった。

「えっ？まあ、はい」

「ところで東馬さんはこんなところで何してるのかなかな？」

くっ……フローレラまで敵に回ってしまったか……

こうなったら上手く誤魔化すしかないと考えた僕だったが、こういうときに限って良い言い訳が思いつかなかった。

追い詰められたせいか、徐々に血の気が引いていくのを感じた。

「ああ、そういえばそろそろでしたよね。誕生日は」

今まさに最後の砦も敵の手に落ちてしまった。

確信をつく恵美ちゃんの一言でもどうすることも出来なくなった

僕は正直に話そうと口を開いたその時だった。

「瑞葉ちゃんの……」

「えっ？」

恵美ちゃんの言っていることが上手く理解出来なかった。

「今何を……」

「だから、そろそろ瑞葉ちゃんの誕生日だからそのプレゼントを選びに着たんじゃないんですか？」

なるほど。

確かに瑞葉の誕生日は8月10日だから千草さんの誕生日のすぐ後というわけか。

ここは上手く話を合わせて……

「はあ、ばれちゃったか。」

そういうことだから、3人とも協力してくれないかなあ？」

「そういうことなら任せるYO！」

「親友の為なら……」

「仕方ないですね」

こうして3人は協力してくれることになった。

各々気に入りそうなプレゼントを選ぶということで、別行動を取る事になった。

そう言えば例の罰ゲーム以来、恵美ちゃんと瑞葉はいつの間にか仲良くなっておりしばしば家に遊びに来ることも多くなっていた。

「ようやくこれで一安心か……」

意外と広い店内で僕は安心しきっていた。

今のうちにこっそりと買ってしまった……

そう思いながら棚に並ぶ賞品をみていた時だった。

「何が一安心なんですか？」

背後から突然そんな声が聞こえてきた。

「うわあ、って若嶋か……ビックリさせるなよ」

「先輩、実はプレゼント渡すのは瑞葉ちゃんじゃないから『今のうちにこつそりと買ってしまったえば……』』とか思っていたとか？
まあ、今回は見逃してあげますけどね……」

言うだけ言つと若嶋はその場から立ち去っていった。

こ、こええ〜。

てかなんで読心術なんて物使えるんだよ！？

知らざる若嶋の一面を見せられ、あまりの恐怖に鳥肌が立っていた。そんなこんなでこつそりとプレゼントにペンダントを買った後に再び店を回っていると、恵美ちゃんとフローレラに呼ばれた。

「これなんてどうでしょうか？」

2人が同時に指差した先には可愛らしいマグカップがあつた。それも2つ付きの。

「別に2つじゃなくてもいいんじゃない？」

そう言つと2人は怒つたような表情を取りながら言つた。

「2つじゃないとダメなんです！」「」

2人の迫力に押され、瑞葉のプレゼントにペアのマグカップを買つた。

そしてその帰り道……

「今日ありがとう。」

みんなのお陰で良いものが買えたよ」

そう言つと僕等はそこで別れた。

後日、2人にはそれぞれプレゼントを贈り喜んでもらった。
が、それはまた別のお話。

第19話 新生徒会長の厄災

先日の出来事から3日後、生徒会の立候補者が定員数と一致したため、信任投票となった選挙で晴れて生徒会役員の一員となった僕。それでたった今、就任式の真つ最中であつたのだが……

「それでは新生徒会長挨拶」

司会進行のアナウンスが入ってから1分後、ようやく僕の隣の人が立ち上がった。

因みに僕の役職は副会長で、瑞葉は書記になった。

「ええつと……なんだっけ？」

新生徒会長の第一声はそれだった。

僕の周りの役員たちは頭を抱えていたところ、瑞葉は躊躇わずに会長の所に行くと何か耳打ちをした。

「えっ、うん。うん、わかった」

マイクが入ったままなので、会長の声は体育館中の漏れていた。

想像以上の姿だったのか、生徒達はざわめき始めたところ、それは起こった。

「静にしろテメーら。ガタガタ言ってる奴はこの木刀で叩きのめされてーのか!？」

このとき、世界は止まったかのように感じた。

ついさっきまで眼鏡を掛けていた会長の眼鏡がないし、それに口調

というか性格そのものが変わっていた。

「私の名前は火谷^{かや}怜美^{れいみ}。

今日からこの学校の頂点に君臨することになった。

私が会長になったからには、貴様らのその甘ったれた根性を叩き直してやるから、楽しみに待っているが良い。

以上」

そう言い終えると火谷は僕の隣の席に戻った。

それが僕と会長との出会いだった。

そして就任式を終えてから1週間が経ったときのことだった。

この1週間はやる事もなく、ただ平穏な日々を送っていたのであったが……

「並川はいるか？」

昼休みという至福の時間に突然、鬼のような形相^{かみそう}で火谷は僕の教室に押し掛けて来た。

そう、眼鏡なしの状態だ。

「なに呑気に飯を食っているんだ？

さっさと生徒会室に行くぞ」

そう言うとき火谷は僕の制服の襟元を掴むと、そのまま引き摺^{ひきず}っていった。

実は、この1週間で火谷のことを大智に調べてもらっていた。

火谷^{かや}怜美^{れいみ}。

2 - Bで成績は学年トップ。

普段は大人しいのだが、体育のとか運動の時は驚異的な身体能力を

発揮するらしい。

それ以上のことは大智にすら分らないという有様であった。ただ1つ言えることは、眼鏡なしの状態（これを『死の制裁モード』と命名）になったときの火谷には逆らうどころか近づいてはいけな
いということだった。

そんなこんなで生徒会室に拉致・連行された僕と他2名は、会長の威圧的な態度の前で縮こまっていた。

「先輩、なんなんっすか？いきなり」

僕の左隣では1年で会計の海潮勝（うみしほかつ）が状況を理解しきれずに僕に助け舟を求めている。

「知らないよ。全く……」

こつちが聞きたい位だったのに……」

火谷という恐怖を前にして泣きそうだった。

……いや、泣いている人がすでに僕の右隣にいた。

「うう……なんで私まで……」

1年で僕と同じ副会長の真崎知花（まざき ちか）がこの理不尽なことに涙まで流していた。

分かる……分かるよ、その気持ち……

僕は心の中で同情するが、実際には何ができるといってもなくただ身を固まらせているほかなかった。

そして瑞葉はというと……

「会長、こちらが例の書類です」

うまく会長に取り入っていた。

な、なんて奴だ……

正直瑞葉が人の下に立つなど考えもしなかったのでビックリしていたが、それもすぐに間違いだと思い知った。

こ、こいつ笑ってやがる……僕のこと見ながら笑ってるし……

その行動は頭に來ていたが会長の手前、何も出來ずにじっと座っているしかなかった。

「うむ、ではこれより7月24日に行う『並川東馬公開処刑』についてだが……」

「ん！？今なんと……？」

なぜだか幻聴のようなものが聞こえたような気がした。

「黙れ！この下種な罪人が。」

貴様の犯した罪の重さをその身で知るがいい」

「な、犯罪なんか犯してないし。

というかこんなもの認めるかー！」

あまりの理不尽さにいつもより2割増しで突っ込みを入れてみたのだが、火谷はそれに全くと言って良いほど動じていなかった。

「五月蠅い、貴様は私の……私の大切な……」

「？」

話が全く見えてこなかった。

僕は就任式で火谷と初めて会って以来、会話すらしていないので心

当たりがなかった。

「貴様は私の大切な……大切な瑞葉を自分のもののように扱いやがってー！」

貴様、死んで私に詫びるがいい。

そして瑞葉を私に寄越すがいい」

「誤解だあー！そんなもんいらないし……
つというか欲しければくれてやるし……」

「ええー！そんな……お兄ちゃん……」

あの夜の約束は嘘だったの……？

『もう二度と君を手放さない……愛してるよ……マイハニー』って
言ってくれたのに……」

「な、な、なんてことを……」

私の瑞葉になんてことを言ってるんだあー！」

なんだかもう收拾がつかなくなっていた。

可哀想なことに先ほどからジツと座ったまま見ている2人はいつ自分が巻き込まれるのか冷や冷やししながら部屋の端の方に避難していた。

「捏造するのだけはやめてくれえ」。

マジで会長怖いから……

ホントにこんなんでいいなら上げますから」

「えっ、いいのか？ヤホーイ。

はあ、はあ、はあ、もう放さないよ、瑞葉」

「お兄ちゃん、こんなのは流石に酷いんじゃない……」

ま、待って火谷先輩。

まだ話が……やめて〜！」

なんとかこの騒動から抜け出すことに成功した。

その時ふと、熱い視線を感じた。

部屋の端の方に避難していた2人は僕のことをじっと見ていた。

もう僕らには言葉は必要ではなかった。

3人は互いに顔を見合い頷くと、静かに生徒会室を後にした。

全てはなかったことに……

それが僕らの出した結論であった。

この時間内に僕らの信頼関係が深まったという点では今日の出来事に感謝しなければならない。

それぞれの思いを心にしまい、僕らはそれぞれのクラスに戻った。

その後、瑞葉はボロボロになった制服を着て家に帰ってきたということと言うまでもないだろう。

第20話 真夏の小さな訪問者

夏休み。

それは1年に1度だけ訪れる自由の象徴。

子供たちは自由を手に入れ、日々の疲労を癒す季節。

そんな夏休みであるにも関わらず僕は今学校にいた。

思い返してみれば、それはある1本の電話から始まったのであった。

7月25日

昨日はようやく長かった1学期が終了した。

先の『処刑事件』を命辛々逃れ（尊い犠牲者1名）、ようやく手に入れた安息をどのように過ごすか考えていた時だった。

プルルルル……プルルルル……

面倒なので突然鳴り出した電話を瑞葉に任せようとしたが、瑞葉は朝から部活に行っていることに気付き仕方なく自分で取ることにした。

「もしもし、並川ですが……」

あつ、お久しぶりです。

ええ、2人とも元気です。

えっ、空ですか？

いえ、知りませんけど……

はい、分かりました。

ではこちらに来たら折り返し電話致しますので……

はい、それでは」

電話の相手は親戚の叔母さんだった。

話によれば、僕の父親の妹の娘……つまりは僕の従兄弟の神矢空かみやそらが
家出をしたらしいという情報だった。

空は今年から中学１年生になる身長１４０ｃｍと小柄な女の子である。

「ああ、なんでこんな時に……」

ひとまず瑞葉にも連絡しておかないと」

——ピンポン、ピンポン——

携帯を取り出し、瑞葉にメールでも入れてやるかと思っていた時に
タイミングよくチャイムが鳴った。

「はいはい、今行きますよ」

そう言いながらドアの前まで行き、開けた。
するとそこには……

「東馬お兄ちゃん、久しぶり」！

「！？」

「………そ、空か！？」

久しぶりだなあ。

３年ぶりか？元気にしてたか？

「………って、なんでここにいるんだあ！？」

ついさっきまで電話の話題になっていた空が今、僕の目の前にいた。

「ええ、なんでって……」

それはお兄ちゃんに会いに来たに決まってるじゃん」

空はそう言いながら僕に向かって飛び込んできた。

「おお、そうかそうか。

お兄さんは嬉しいぞ」。

そう言えば空はどうやって家まで来たんだ？

駅から家まで結構な距離はあったし、分かりづらかっただろう。

それに家の場所は知らないはずじゃあ……」

「うん。けどね、あのお姉さんに道を訊ねたら一緒に来てくれたの」

空は嬉しそうに僕の胸のあたりを頬擦りしながら、ドアの方を指差した。

「空は賢いなあ、偉いぞ。

さて、そのお姉さんにお礼をしなきゃね」

僕は抱えていた空を優しくゆっくりと降ろすとドアの方を見て言った。

「えっと、空がお世話になって……。

ってなんだ、柊か」

「わ、私で悪かったわね！

それより並川君、顔ニヤケすぎ」

そこには何故か拗ねた感じをした柊が立っていた。

「まあ、ともあれ空が無事ならそれでなによりだ。
さあさあ、上がって座りなさいな」

僕は空にそう促すと叔母さんに連絡を入れる為に家の中に入ろうとしたところ、あることに気がついた。

「そう言えば柊、僕に何か用でもあったのか？
でないとわざわざ知らない子を送り届けたりしないだろう」

「べ、別に大した用じゃ……
じゃあ、私は帰るから」

柊は顔を赤くして門から出ようとした。

「まつ、待てよ。家まで結構な距離あったんだから、少し家で休んでよ。」

ちょうど昨日作った新作のプリンがあるんだが……」

「す、少しくらいなら……仕方ないわね。
並川君がそんなにいるなら……」

流石に1年以上同じ部活にいと、食べ物好みなどは次第と分か
つてきてしまうものだ。

こうしてうまく柊に空の面倒を任せている間に電話を済ませてしま
おうという作戦だったが……

「ん、おいしーい」

僕が電話している最中に度々その様な声が聞こえてきた。
そして電話を終え、リビングに戻ってみるとそこには姉妹のように

仲良さげに会話していた。

その様子を見ながらキッチンに行き、冷蔵庫の中を確認してみた。すると案の定30個作って置いたプリンは跡形もなく、リビングのテーブルの上にはきれいに聳え立ったツイントワーが完成していた。

「お、お、お前ら……. どんだけ食ってるんだあー！
ああ……. また瑞葉に…….」

きつと部活から帰ってきた瑞葉にコツテリ叱られるだろう。

これが楽しみで部活やってるとも言えるからな…….

そうそう、空のことは結論から言ってお家出ではなかったらしい。

夏休み中は両親共に仕事が忙しく、空の相手をしてやれないのだと言っていた。

そのためしばらくの間、こっちの家……. つまりは僕の家に行ってきたらいい。

と、伯父さんが促したのを叔母さんが聞いていなかったため今回の騒動になったという。

結局は叔母さんの勘違いというわけだ。

というか、何故に空を家に寄越したのかが未だに不明だった。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。お願いがあるんだけど…….」

少し考えていると、突然空が僕の近くに寄り添いおねだりをしてきた。

「なんだい、空？

お兄ちゃんに出来る事なら何でも言っていていいぞ」

「あのね、私…….

お兄ちゃんの通う高校に行ってみたいの！」

こうして今、僕と空と柊の3人は夏休みなのに学校に来ていた。時刻はそろそろ正午になろうとしたころだろう。

僕は空の話を聞くと急いで3人分の弁当を作った。

「そう言えば、柊はここまで来る必要なかったんじゃないか？」

「べ、別にそんなこと私の勝手じゃない！」

時間もあつたし、並川君がどうしても言うから……」

いやいや、言っていないし……

夏の日差しが照りつける中、こんなところで立ってるのはそろそろ限界だったので適当に日陰を探すことにした。

「それにしても暑いなあ。

お、そこにいい日陰が……」

僕達はちょうど校舎で出来た日陰を見つけ、そこに移動した時だった。

「お、お兄ちゃん。た、た、助けて〜！」

こ、この声はまさか……

声のする方を見ると、瑞葉が涙目で走ってきた。

「ど、どうした瑞葉。まさか……いじめられたのか!？」

瑞葉は僕の後ろに隠れると大きく首を横に振った。

「じゃあ一体どうした……」

そう言いかけてから、あるものを見て言葉が詰まった。

実際それはいじめよりも遥かにひどかったかもしれないものだった。

「瑞葉、私の可愛い瑞葉はどこだあゝい？」

隠れてないで出ておいで。グフフ……」

火谷が不気味な笑い声を上げながら目をギラギラさせ、こちらに近づいてきた。

『もしかして会長、瑞葉アンテナでもついているのか？』と思うくらい、的確にこっちに向かってきた。

「おやまあ、これはこれは……お義兄さんではありませんか。

ところで私の瑞葉を見ませんでしたか？」

「待て待て、僕はお前の『お義兄さん』になった覚えはないのだが……」

「ちょっとお兄ちゃん、『私の瑞葉』ってところも否定してよ」

僕の後ろに隠れていた瑞葉は耐えかね声を出してしまったため、それに反応した火谷によって瞬時に捕獲された。

不気味な笑みを浮かべながら、火谷は瑞葉を担いで行こうとしていた。

そんな中しきりにSOSのサインを送ってくる瑞葉に同情した僕は、勇気を振り絞って火谷を呼びとめた。

「ちょっと待て火谷。

折角だしみんなでお昼にしないか？

ほら、大勢で食べた方がご飯もおいしいと思うし……」

思い切った提案に少々考える火谷。

「それもいいが、私は瑞葉をいただくわけで……
私はいいのだが、みんなに見られるのは瑞葉が恥ずかしいと思うわけ……」

「ごめん、残念ながら無理だわ」

「そ、そんなことしないでよ、会長。
普通にみんなでご飯食べようよ」

「ううむ……」

そして考えること3分……

「うむ、瑞葉がそこまで言うなら仕方ない……
ここではなんだから、生徒会室で食べることにしよう」

火谷を僕達は先頭に普段なら閉まっているはずのドアを開け、校内に侵入した。

あれ、会長が持っている鍵って確か生徒会室用だけだったような……
そんなことを疑問に持ちつつも、こうして涼しい場所に來られたのであまり深く追求しないことにした。

生徒会室に到着した僕達は、会議用に並べられた長机を並べなおし
5人が座れるようにした。

「終わったぞ……って、あれ？
2人は……？」

いつの間にか柊と火谷はいなくなっていた。

まあ、そのうち戻ってくるだろう……

そう思い作ってきた弁当をテーブルの上に広げている時だった。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。」

そう言えばあの子って……」

「ああ、まだ瑞葉には言っていなかった……娘のことを……」

「ええ！？お兄ちゃん、娘って……まさか……」

啞然とした顔をする瑞葉に僕は更に追い打ちをかける。

「そうだ。実はこの子は僕の……僕の隠し子なんだ！」

「えええー！ー！ー！？」

お、お、お兄ちゃん……いつの間に……

私は心当たりないから……

まさか他の女との……！？」

少々冗談が過ぎたせいか、瑞葉が軽くショートし掛けた時だった。

「もぉー、瑞葉お姉ちゃん忘れちゃったの？」

私だよー、空だよー！」

「ええ！？空って……私たちの従姉妹の空ちゃん？」

な、なんでここにいるの……！？」

先ほどから驚きっぱなしで錯乱状態の瑞葉に僕は朝からの一連の騒動と真実を説明した。

そして5分後……

ようやく状況を理解した瑞葉は久しぶりに再会した空と仲良さそうに話していた。

それをいつの間にか帰ってきていた火谷が横から見ながら、『妹……瑞葉の妹……』とか口走っていたが、正直もう僕には手に負えないので見なかったことにした。

こうして5人が揃ったところで始めた昼食会なのだが……

「はい、東馬お兄ちゃん。あゝん」

「ああ、ちよつと、空ちゃんだけずるいよ。」

私だって……お兄ちゃん、あゝん」

なんとも羨ましそうな光景だが、こう身内同士でやっても一般人である僕はなんとも言えない感覚に陥っていた。

「……1人で食べるから……」

つと、柊は何をやってるんだ？」

喧嘩を始めた2人を放っておくことにして、隣の方を向いてみると箸で卵焼きを掴みながら空中で静止している柊がいた。

「え、べ、別に何でもないんだから！」

そう言うとき柊は卵焼きを自分の口に運ぶと走って生徒会室から出て行ってしまった。

「瑞葉、私もやりたい……じゃなくて、私にもやって欲しいのだから……」

火谷はというと、僕に憎悪の念を送りながら瑞葉に頼み込んでいた。

「ほ、ほらお兄ちゃん。唐揚げ食べたいんでしょ？あぐん」

瑞葉も瑞葉で火谷の恐怖から逃れる為か、必死になって僕に食い付いてきた。

と、そのときだった。

——ガラガラ………

平穏だった空気が一変した。

原則として夏季休暇中、生徒が校内に入るとは禁じられていたが、それを面白半分で入る生徒たちは毎年何人かはいたりする。結局は教師にさえ見つからずに楽しめれば良いので、場所さえ選ばは見つかる恐れもなかった。

そう考えて職員室から対角線上に位置する場所を選んだはずだったのだが、どうもこの人には常識というものは通用しないらしい。

「あらら、ここはどこでしょうか？

あら、並川君じゃありませんか。

こんなところで一体何をしているのですか？

夏季休暇中は……」

こうして僕らは偶然入りこんできた高須先生に見つかり、長々と校則を聞かされた後で職員室に連行された。

職員室に向かう最中に柊も確保され、結局は5人全員連れて行かれる羽目になった。

「さて、校則を破った者には当然罰が与えられなければならないわね。

では、今夜の10時に5人でここに来なさい」

それだけ伝えると先生は意味深な笑みを浮かべながら、僕達を解放した。

その後、僕達は仕方なく解散となり各々の予定に戻った。

僕と空はすることがなかったので、家に帰ることにした。

まさかあんなことになるとは誰も想像していなかっただろう……

そんなことは今の僕達に知る由もなかった。

刑執行まであと8時間………

第21話 真の恐怖はすぐそこに……

P M 1 0 : 0 0

高須先生の指示通りに僕ら5人は学校の校門の前で待たされていた。

「人を呼び出しておいて自分が来ないなんて……
いったいこれはどういうことなのよ？」

「いや、僕に言われても……」

予定の時間が過ぎたにも関わらず、一向に高須先生の姿が見られないことに柊は癇癪を起していた。

「ああ、月の光で美しく輝く瑞葉もまた……」

「キヤー、来ないでよー！」

こんな時間に呼び出されてみんな疲労が溜まっているだろう中、火谷は一人だけ元気に瑞葉を追い回していた。

そんな瑞葉の姿を可哀想に思ったが、ここに介入すると面倒なことになりそうなので考えないことにした。

こんな兄を許してくれ、瑞葉……

「ねえ、東馬お兄ちゃん、空眠いよあー」

「ちょっと並川君、どうにかしなさいよ！」

こっちもこっちで人のことを心配している暇はなかった。

「ああゝもう、先生はなにやってるんだよ!？」

流石の僕もどうやら怒りの限界が来ていた。

「……………先生なら中で待つてる……………」

「うわぁ!？」

……………つてなんだ、不浄か。

ビックリさせるなよゝ

……………つて、なんでここにいるんだ!？」

影が薄いといつてもいるなら初めから声をかけて欲しかった……………

『夜の薄暗さ＋存在が薄い』のコンボで不覚にも幽霊かと思った僕は涙目になりながら不浄に訊ねた。

「……………大智君から連絡があつた。

『今日、夜の10時から肝試しやるから来ない?』

つて……………」

「えっ……………き、肝試し!？」

その言葉を聞いた柊は急に血の気が引いたような顔をした。

「へえゝ、柊にも怖いものがあるんだあゝ」

「んな、大人の私がお、お、お化けなんて怖いわけないでしょ!」

声を震わせながら必死に強がる柊。

まあ、あんまり言うつと終わつたときに何されるか分からないのでこの辺でやめることにしよう。

「それで僕達はこれからどうすればいいんだ？」

「……これを……」

不浄は手に持っていた紙を僕に渡してきた。

その紙をよく見てみると、どうやら学校の見取り図になっていた。
見取り図には赤い線が入っていて、推測するにここを通れということらしい。

つてかいつの間にこんなものを用意したんだ……？

「……2人1組になって行く……」

不浄の言葉を耳にした瞬間に火谷が動いた。

「へへへ……もちろん瑞葉は私と一緒にだよ」

「えっ、ちょっと……私はお兄ちゃんと一緒に……」

ガツチリと腕を掴まれた瑞葉にはもう身動きすらとれない状態になっていた。

そして残った僕らはというと……

「東馬お兄ちゃん、空はお兄ちゃんと一緒にいいなあ」

空は僕の片腕に抱きつきながら言った。

「な、並川君がそこまで言うなら仕方ないから一緒に行ってあげるわ」

対して柊は震える手で僕の腕を捕まえていた。

やれやれ、先が思いやられる……

こうしてペアが決まったので肝試しとやらを始めることになった。

まず始めに火谷・瑞葉ペアが先に行き、10分後に僕らがスタートすることに決まった。

引き摺られるように攫^{さら}われていった瑞葉を見て10分後……

「それじゃあ、そろそろ行くか」

「レッツゴー！」

「……………」

1人だけテンションが低かった。

「なにやってるんだ柊、置いてくぞ」

「まっ、待ちなさいよ」

なんだかんだ言っただけで柊も残るのではなくついてくるのであった。

PM10:30

覚悟を決めた柊を先頭に僕らは1階の廊下を歩いているところだった。

「なんで私が先頭なの！？並川君が……」

「へえ、柊は怖いんだあ？」

「こ、恐くなんかないんだから！」

先ほどからこの会話を何度したことか……
柊をからかいながら順調に歩を進めていた。

「『まずは調理室へ向かえ』って書いてあるよ、東馬お兄ちゃん」

「いきなり殺意満々じゃねーか！」

薄々気づいていたが、この肝試しの企画者はどうやら僕のことをここで殺めたいらしい。

恨みとか買った覚えはないのだが……
指示通りに僕は調理室に向かった。

そこで出くわした肝試しとは全く関係のない珍妙な生き物が……

「わりいゝ子はいねーかあ？」

「……………」

「なんか言つて下さいよ、並川先輩」

「いや、その……なんというか……頑張つて？」

正直こういう状況でなんて言えばいいのか分からなかった。

「！？」

そつですよね、いまどきこんな格好なんて……」

相当落ち込んでいるのか、奇妙な格好をした成瀬は重たそうな足取りでその場を後にした。

「他に言うことはなかったの？」

恐いものが苦手のはずの柊も流石にこれは恐がっていなかった。

「……………無かったな」

さて、気を取り直して次の場所に向かうために再び地図を開いた。

「今度は『音楽室に向かえ』だつて」

いつの間にか地図を持つ係りになっていた空が次の指令を言った。
この調子ならどうせ次も…………

そんなことを思いながら僕らは音楽室に向かった。

「それじゃあ、柊がドアを開けて」

「どうせまた優みたいなのがいるんでしょう？」

調子に乗った柊がドアを開けたのだが、3秒静止した後にもものすごい勢いで閉めた。

「なにがあつたんだ、柊？」

「で…………」

「で？」

「出たあゝゝ！」

そう言うと柊は悲鳴を上げながら、僕と空を残して走り去ってしまった。

った。

柊の様子から見るにどうやら今回は本物の幽霊がいるらしい。

「空、お兄ちゃんが様子を見てくるからここで待っててくれないか？」

「ええ、空も一緒に行きたいよ」

「ダメだよ。」

空にもしものことがあつたらお兄ちゃんは……」

「じゃあ、早く空のもとに帰ってきてよ？」

僕はそれに頷くと、空も心配そうな顔をしながらも僕を見送ってくれた。

意を決して音楽室のドアを開け、中に入るとすぐに閉めた。これで空への被害はないと判断したからだ。

「——時空の狭間から生み出されし者よ、その真の姿を闇から表したまえ——」

ビス・ラマン
『邪魔犬』

先ほどまでは月明かりに照らされていた音楽室であつたが、突然暗闇に飲み込まれた。

そして部屋を中心に怪しい紋章が浮かび上がった。

強烈な光を放った後に気がつく紋章は消えていた。

だが、先ほどまではなかったものがそこに存在していた。

「……犬？」

「待て待て！

まず気付くのはそこじゃないだろ！！

この俺を忘れたとは言わせないぜ！」

「……………」

ああ、確かにこんな顔のやつをどこかで見たような……

うう……………思い出せない……………

となると別に思い出さなくてもいいやつなのかも……

そんなことを思っているのが分かったのか、その人物はかなり憤っていた。

「き、貴様……………」

ならば仕方ない、その身でこの苦しみを理解するがいい。

行け、我が僕よ」

そう言ったものの、何も起こらなかった。

ってか本当にこいつ誰だ……………？

「神重から渡されたこの犬は言うこと聞かないじゃないか！？」

くそ、みんなして俺のことを馬鹿にしゃがって……………」

なんか愚痴をこぼしているみたいだが、別に大したやつでもなさそうだし帰ろうとした。

「ちょ、まだ戦いはこれからだぞ並川！

この長年の恨みを晴らしてやるわ」

そんなことを言っているものの、こちらに向かってくる様子はなかった。

「ハ、しまった。
迫力を出すためにワイヤーで天井から吊ったままだった!」

なるほど、これを見て柊は幽霊と勘違いをしたらしい。

確かに柊だったら人間が宙に浮いていたらお化けか幽霊に思つのも無理はないだろう。

そんなことよりも、あの恐がりの柊が一人で行ってしまったことが心配になったので僕は音楽室を出た。

「東馬お兄ちゃん、怪我はない?大丈夫?」

僕が出てきた途端に空は抱きついて訊ねてきた。

「うん、問題ないよ。」

じゃあ、とりあえず柊を捜しつつ次に行こうか」

音楽室ではまだ何か騒いでいたが僕らは気にせず次場所へと向かった。

「ここが最後みたいだよ」

指示通りに向かった僕らは最後の目的地らしい料理研究クラブの部屋の前に来ていた。

「なんだかもう肝試しじゃないような……」

危険ではないと判断した僕は空も一緒に入ることを許可した。

「じゃあ、いち、にの、さんで開けるからね」

「いち、にの、さん！」

僕は思い切りドアを開けたが部室は真っ暗で何も起こらなかった。僕らが部室に入ってから5秒後……

「……せいの……」「……」

大勢の声が聞こえた次の瞬間だった。

パン、パン、パン――

大きな音が鳴った直後に部室の電気が着いた。

「……空ちゃん、^{シグマ}姿熊高校へようこそ！」「……」

明るくなった部室にはほぼ全員揃っていた。

そして窓には『ようこそ^{シグマ}姿熊高校』と書かれたプレートが掛かっていて、部室のいたるところにパーティー用の装飾がなされていた。それを踏まえるにどうやら先ほどの爆発音はクラッカーのようだった。

「み、みんな……」

「なあゝに、感動しちゃってるんだよ？」

こんなイベントがあるのに俺を呼ばないなんて水くさいだろ」

一番前にいた大智が僕のそばに寄ってきた。

「さあ、席について始めようぜ！」

それじゃあ主役の空ちゃんは真ん中で……」

一連の事の真相は僕らが学校から去った時に遡る。

「あ、もしもし大智先輩？

私です、瑞葉です。

実は折り入って頼みたいことが……」

部活に戻る前に瑞葉は大智に電話をして事情を説明した。

そして15分後……

「あつ、高須先生探しましたよ。」

実は折り入ってお願いがありまして……」

大智は瑞葉ちゃんからの電話を受けた後即座に学校に向かった。

まずは先生を説得させることが最優先と考えたからだ。

そしてなんとか了承を得ると、次は自慢の情報網を生かして出来る限りの人を集めることだった。

連絡がネズミ算式に広がって行き、今の人数に至るわけだった。

そして大智の指示で肝試しプランと歓迎パーティープランを同時進行させた。

人数が多かったのであっさりと終わってしまった。

本来なら全員参加する予定だったのだが、夜も遅い時間帯で何故だか電車通学の人も多かったため準備だけをして帰る人が多かった。

「なんてったって、神重の頼みじゃあ断れねーよ」

そう気さくに言う声が多かったのも大智の信頼の高さによるものだった。

そして今に至る。

「大智、ありがとな。」

それにみんなも……」

「何言ってるんだよ、俺達は『友達』だろ？」

本当に僕はいい友達に恵まれていると思った。

いつの間にか空もこの場に馴染んでいた。

「それじゃあ、コップはみんなに行き渡ったかな？」

んじゃあ、空ちゃんがここに来たことに………」

「……カンパイ！」

この夜のことを忘れまいと僕は心に誓いを立てたのであった。

第22話 姫と庶民の暮らし方 前編

空が我が家に来てから4日が過ぎようとしていた。

毎日空に連れ回まれる生活を送っていたが、これはこれでまた解放感があり楽しいものだった。

そんなある日の早朝、日課となった新聞を取りに行くと新聞以外に珍しく郵便物があつた。

「ん？なんだ、これは……」

滅多に来ることのない代物なのでかなり戸惑っていた。

ただでさえもこの現代、手紙など書く習慣が消えつつあるので封筒に入った手紙を読むことがなくなっていた。

そう考えてみるとこうして心の籠った手紙というのは案外嬉しいもののなのかもしれない。

「何々……」

『拝啓、並川様

先日は空さんの歓迎パーティーにご招待頂きありがとうございます。さて、本日私の誕生日パーティーが催されることはご存知でしょうか？

そこでこのパーティーにあなた方をお招きしたく思います。

都合がよろしければ是非参加をお願いします。

敬具、千草美鈴』

そう言えば確かに今日は千草さんの誕生日であつた。

いや、決して忘れていたわけではない。

最近いろいろありすぎて思い出すのに時間がかかったただけなんだ……誰もいないところで一人自分の過ちを否定していた。

「お兄ちゃんどうしたの？」

早くご飯作ってくれないと部活遅れちゃうよ」

リビングで苦情を訴えてくる瑞葉の声で現実意識を戻した。

「えっ、もうそんな時間！？

10分……いや、5分待っててくれ！」

僕は太急ぎでキッチンに戻り、朝食の準備に取り掛かった。
そう言えばパーティーなんて何着ていけばいいんだ……？

そんなわけで部活に行く瑞葉を送った後、呼び出したわけだが……

「そんなわけで僕はどうすれば……」

「そんなってどんなわけだよ！
まだ何も説明受けてないから」

いつもとノリ突っ込みが逆になっているが、そんなことは今問題ではない。

夏休みの午前7時というかなりの早朝に親友である大智を呼び出したわけだが……

「なんだよ、使えないな」。

親友だと思っならそこら辺はこっ……テレパシー位つかえるだろ？」

「んなもん使えるかあ！」

っていうか、最近俺の使い酷くない!？」

絶妙なタイミングで突っ込んでくるところが、親友として過ごしてきた絆を感じたようなしないような……

「そんなことは全くないぞ。

別に大智をわざと省いたり、わざと考えないようにしていたことなんか一度もないぞ!」

「やっぱりわざとだったのか……」

始めうちは面白い半分で作っていたが、いつの間にか止めるタイミングを見失っていた。

「だから僕が言いたいのは、人生初で最後になろうパーティーというものにはどんな服装で行けばいいのかと聞いているんだが……?」

「それを今初めて耳にしたのだが……」。

つまりお前は緊張してパニックってるあげく、たかだかパーティーごときにとんだ勘違いしている恥ずかしい奴ということか!」

思っていたより核心を正確にかつ的確についてきた大智に一瞬で主導権を握られてしまった。

「た、確かに緊張してパニックっているが恥ずかしい奴とは心外な!ば、僕は元々恥ずかしい奴だから………そ、そんなこと言っても動じたりはしないからな!」

「お前………パニックりすぎ………」

そんな話がその後大体30分位続いた。

予想外に時間を食ってしまった僕等は話の始めに戻ることにした。

「改めて、パーティーっていうのはどんな服装が好ましいんだ？」

「だ・か・ら、さつきからも言っているんだが、お前と同じ用に平々凡々な生活を送って来た俺にどんなアドバイスを期待してるんだ？もっとたくさん適任者はいるだろうが！」

確かに大智の言うことには一理ある。

だが、僕の周りにそんな人物は……………。

いや、1人だけ適任者がいた。

それもすごいのが……………

「で、なんで私を呼ぶんですかぁー！？」

と、緊急事態が発生したと呼び出しをくらったのはフローレラだった。

「いや、だって……………」

確かフローレラは王族出身の皇女で、何人もの男を金で買っては捨てるという伝説を……………」

「そんな根も葉もないことを……………」

久しぶりに我が家に呼ばれたフローレラの第一声がこれだった。

事実と反した設定を着色され、フローレラはかなり落ち込んだ表情で僕等を見ていた。

ちよっと悪い事をしたかもしれない……………

「で、なんで私を呼ぶのよ!？」

「もうこうなったら逆に庶民的な意見で行こうかと……」

屈辱的な理由で呼び出された柊は当然のことながら怒っていた。

「そ、そんな理由で……」

言っておくけど、私の家は結構お金持ちだからね!」

勿論それを知っているから呼び出した訳だ。

まあ、既に庶民的な人が一人いたが全く使い物にならなかったのだから、2人も必要ないということだ。

そこに気付かない柊もまだまだだな。

「ちょっと待て!

お前今、俺に対して嫌みを言わなかったか?」

「気のせいだろう……」

本当は既にテレパシー的な能力持っているんじゃないかと思わせる位勘が鋭くなってきたような。

「そこでだ!

是非とも柊にパーティーの極意を教えてもらいたいんだが……」

こうして柊の元、特訓が始まった。
パーティーまで残り8時間……

第23話 姫と庶民の暮らし方 ～後編～

柊宅に到着した僕達はすぐさま体育館のような広さのある部屋に案内された。

そして始まったのが、地獄を見るかのような特訓だった……。

「ああ、もう！

そこは右足からじゃなくて左足からで……

横じゃなくて斜め前に足を出すのってさっきから言ってるでしょ！」

パーティー用の服装を用意してもらはずだったけど、いきなり始まったのがこのダンスの練習である。

始めは軽く流してやれば良いものだと思っていたけど、甘かった。

ダンスの練習が始まった途端に柊は表情が変わった。

僕に対してさらに厳しく当たるようになったのだ。

まさに鬼コーチのように……

「あの～柊、そろそろダンスの練習を終わりにして服を選ばなきゃ……」

「黙らっしゃい！！

あなたにダンスの何が分かるというの！

この位で調子にのるんじゃないやありません」

すでに柊の言葉遣いが別人と化していた。

ダンス素人の僕に向かってかなり酷いことを言われたような……

「そ、それにこの私がダンスの相手をしてあげているんだから……か、感謝しなさいよ」

「……けど実際にダンスに参加するかは……
まして相手がいないし……」

そう呟いた瞬間に背筋に悪寒が走った。

まるで後ろから睨みつけられているような感覚だった。
き、気のせいだろう……

心の中でそう自分に言い聞かし、絶対に後ろを振り向かないようにした。

「……私がいるじゃない……」

背後で呟かれたその声に僕は気付かず、再び練習の再開を余儀無くされた。

そして時刻は午後6時……

僕らは柊の特訓に何とか耐え抜き、柊家の車で会場に向かった。

主旨は変わってしまったが、僕は柊のお陰で自分に自身が持てた気がした。

あとは堂々と胸を張って会場に入るだけのはずだが……
何か忘れている気が……

「服装、何も変わってないじゃん！

普段着だよ、これ……」

何のために柊ん家まで行ったんだ……」

会場に着いてからようやく気づいた事実には、僕はさっきまでの勢いが全て奪われた気がした。

まさか当初の予定を忘れるとは思っても見なかった僕にとって、自分の用意した服装は家に置いてきたままだった。

「ど、どうしたら……」

一度家に戻るか……いや、それだと時間に間に合わないし……
新しいのを買うにもお金がない……」

「何をしてるの！？パーティー始まるわよ……って、なんて格好してるの！？」

まだ車の中にいた僕を心配してか、柊が様子を見に来た。
頼りの綱が柊しかいなかったので、事情を説明し始めた。
そんなときだった。

—— パー——ンツ ——

僕の頬に衝撃があつた後、頬は熱を帯び始めた。

初めは何があつたのか理解できずに、ただただ今起こったことに驚いていた。

そう、柊が突然僕の頬を叩いたのであつた。

何が何だか分からずに戸惑っている僕に、柊は大きな声で言った。

「あなた、何を躊躇ってるのよ！

今までやってきたことはなんだったの？

全ては今日、この日のためじゃない！！」

ただ茫然としていた僕に、柊は更に追い打ちをかけた。

「本気を見せなさいよ！

私の……私の好きな並川君はこんなところで諦めたりしないんだから。

だから……

自分の決めたことはしっかりやり遂げなさいよ、並川東馬！」

そう告げると柊はこの場を去って行った。

「自分の決めたこと……か……

今まで僕は何も出来ないでいた……

だから、だからこそ今日で全てに答えを出そうと思っていた。

けど、実際は服装を口実に逃げていただけなんだな……

柊には後でお礼を言わなきゃな。

僕は……もう迷わない」

一人っきりになった車の中で自分に誓いを立てた。

そして僕は屋敷へと向かった。

第23話 姫と庶民の暮らし方 〱後編〱（後書き）

あれ……

外が寒いんですが……

この前まで夏だった気が……

読者の皆様、大変申し訳ございませんでした。

長らく時間が作れずに、更新が遅くなってしまったことを深くお詫び申し上げます。

つということで、5か月ぶりに更新しましたブッシュです。

この5か月は異様に早かった気がします。

まあ、これも年のせいですか……

長い期間書いてきた（実際話数はそうでもないという……）この作品も大詰めを迎えました。

次話が最終回です！

全く完結していないこの話がどんな終わり方をするのかは……みなさんのご想像にお任せします。

何はともあれ、次話が最終回！

そして、最後には重大なお知らせが……

これまで読んで下さった読者の皆様、次話もよろしく願います！

最終話 君の瞳に映る僕

屋敷の入り口には、すでに大勢の来賓が集っていた。

貴族並みの衣装に身を包んでいる団体の中に一人、Ｔシャツの上に薄着を羽織り下はジーパン姿がいた。

周りから見ても風変わりな格好で、声をひそめて話している姿があちらこちらで見られた。

しかし、僕は気にすることはなかった。

周りからどんな目で見られようとも、どんなに蔑まれようとも僕は堂々とその団体の中を歩いて行った。

望みがあった。

僕が彼女が好きだと言いたいと。

不安もあった。

失敗したとき、どうなるのか。

逃げ出したこともあった。

ずっとこのままの状態でもいいとさえ思った。

だが、みんなは一つだけ僕にくれたものがあった。

それは、勇気。

失敗を恐れない勇気。

逃げ出さない勇気。

そして、思いを告げる勇気。

だから僕は迷わずここにいることが出来る。

僕自身の気持ちに終止符を打つために、僕は扉を開いた。

「それでは、美鈴お嬢様から皆様にご挨拶が……」

「ち、千草さん……僕は……あなたに伝えたいことがあります……」

司会者の言葉を遮るほど、力一杯声を張り上げて言った。
当然、周囲の人々は僕に視線を集めた。

「なんなのよ、あの子は……」「薄汚い格好で、よくこの場に堂々と……」

そんな陰口を叩かれながらも、僕は恐れずにしっかりと前方……壇上にいる千草さんを見ていた。

長年溜め続けたこの思いを、今こそ……
そう思った矢先に、僕の話を守るように千草が口を開いた。

「私も皆様に伝えねばならない大切なお話がありますが、その前に……
……」

今お越しの皆様、本日はこのような式典にお集まりして頂きありがとうございます。
……

本来ならば、お父様がお話することなのでしょうが、明日の準備が忙しい故欠席という形になってしまい、誠に申し訳ありません」

この言葉を聞いた周りの大人たちは騒然となった。

彼らにとってこのパーティーに出席する意味がなくなったからである。
……

大抵の人はこの機会を利用してうまく千草フィナンシャルグループの会長である千草弘蔵に近づこうとする輩ばかりだった。

それゆえに千草会長がいなくなれば、この式典に出席する意味が極端に薄くなってしまうのであった。

「さて、さきほど申し上げました重大な話なのですが……」

私達は大変残念なのですが、本日をもってこの日本を離れなければならなくなりました。

父の仕事の方で海外進出の話があがっていたのですが、ようやく父も決心がつきこのようなことになりました。

この日本で行う最後のパーティーになるかもしれませんが、どうぞ皆様お楽しみ下さい」

一度は興味がなくなった輩も、その眼に再び燈を灯し始めていた。

国内では上位に位置する千草会長の会社が、海外進出するとなれば莫大な金が動くことは間違いなかったからである。

その為にも娘の美鈴の機嫌をとっておいたほうが都合が良い。

帰りかけた者さえ再び席に着き始めるといふ事態が起こっていた。

「……そんな……こんなので……」

壇上を降りていく美鈴の姿が歪んで見えていた。

いつの間にか瞳からは涙が止まらずに流れ出していた。

思いを伝えようと必死だったのに……

これから一緒に送るはずだった時間が、音を立てて崩れていくのを感じた。

結局僕なんか何かやろうとしたって無駄なことだったのかもしれない……

「——諦めるな、東馬！」

お前、まだ何もしてないだろう。

何もしてないのに、何やりきった顔してるんだよ！

ふざけるんじゃないよ！

まだ時間ならあるじゃねーかよ。

行つて来いよ、お前の思いをぶつけて来い！」

「……大智……」

半ば倒れかかった僕の後ろから大智が僕を叱りつける。

「並川先輩、しっかりして下さいよ。」

いつもの先輩らしくないですよ！

私の知っている先輩は、もっと先を見て生きてるじゃないですか。立って下さい、並川先輩！」

「成瀬ちゃんの言う通りですよ、先輩。
当たって砕けろです！」

「……成瀬、若嶋……」

当たって砕けろはどうかと思うし、なんでお前らがここにいいのかは知らないが嬉しい限りだった。

「お兄ちゃん、本当は行ってほしくないけど……
けど、うじうじしているお兄ちゃんなんか見たくないから……
自分の気持ち、伝えてきなよ。
で、でもお兄ちゃんは渡さないからね！」

「……瑞葉……」

気がつくと僕の後ろにはたくさんの仲間が僕を励ましていた。
いつだって僕は仲間に使われ、数え切れないほど救われてきた。
そんなみんなの期待にこたえる為に、僕は……

「みんな、ありがとう……
なんかみっともないな、こんな姿は……」

でも、こんな姿になってもみんながいてくれたから僕は這い上がる
ことが出来る。

行ってくるよ！」

もう何も悩む必要はなかった。

僕はただ自分が正しいと思ったことをすればいいのだから。

目から流れていた涙を拭い、動かなかった足を動かし、会場からい
なくなっていた美鈴を追いかけた。

「全く、世話のかかる奴なんだから……」

「でもそれが並川先輩らしいですよ！」

「……その意見は全面的に同意……」

「みんな、そんなお兄ちゃんが大好きなんだよね……」

会場の中を隈なく探し回ったが、美鈴の姿はどこにも見当たらな
かった。

まさかの事態かと思ったが、その不安もすぐに消えた。

2階のバルコニーにその姿を見つけたからである。

「……千草さん……」

「……並川君……」

ごめんなさい、急にこんなことになってしまつて。

本当は私一人で日本に残るつもりだったのだけれど、どうしても父
が許してくれなくて……」

夏だというのに、今日は涼しい風が吹いていた。

美鈴の揺れる髪の見ながら僕は再び口を開いた。

「どうしても君に伝えなければいけないことがあるんだ……」

聞いてくれるかな？」

美鈴は無言のまま首を縦に振った。

「今、こんなこと言うのは千草さんにとって良くないことなんだとは分かってる。

折角お父さんの言うことに従うことを決めたのに、また迷ってしまうかもしれないから……

でも、僕はこのまま何も言わずに千草さん……美鈴さんを見送ることなんか出来ないよ。

だから……」

「……それ以上は言わないで……

それ以上言ってしまったら、私は……」

静寂という名の風が吹きぬけた。

「私、並川君の気持ちには気付いてた……

周囲の人間は私の事を敬ってくれていたけれど、どこか一步引いたような感じの接し方だった。

けど並川君は初めて私と普通の女の子と同じように接してくれた。覚えてるかな……私たちが初めて会った入学式のこと」

美鈴は僕の目を見ながら真剣に話していた。

そんな姿を見て、僕は口を開かず首を縦に振り答えた。

「道に迷った私を並川君は優しく手を取ってくれた。

あの時は凄く驚いた、けど同時に凄く嬉しかったの。人の温かさを感じた。

私も次第に並川君に惹かれていった。

けど、私ではダメなの……
だから……」

「なんで……」

僕は……僕なんかじゃ君に釣り合わないからダメなのか……？」

「ううん、違うの……」

逆、私なんかじゃ並川君と釣り合わないの……

並川君は凄い人だもの……

いつも並川君の周りには友達が絶えずいる。

それは並川君の人間が大きいからみんな引き寄せられていくんだよ。
私もその一人……

本当はもつとずっと傍にいたかった。

でも、そえには私自身が強くならなきゃいけないから……

だから今は……今はダメなの……」

胸が苦しくなるような思いだった。

そんなことを考えていたなんて、思いもしなかった。

本当の意味で相手の事をよく知っていなかったのだと改めて実感させられた。

そんな僕に言い返す言葉など一つも残っていなかった。

「……かならず……」

かならず帰ってきてくれ！

今の僕では受け止めることしか出来ない。

けど、いつかは……きつといつかはこの思いを伝える。

そのときは美鈴さん、僕の思いを受け止めてくれますか？」

「……もちろんです。」

私も並川君に自分の思いを伝えられるように、向こうでも頑張りま

す。

だから並川君もそのときは……私の思いを受け止めて下さいね」

僕らにもう言葉はいらなかった。

互いの心の奥底にある気持ちを知った時には、心が繋がったのだと感じた。

その日のパーティーが終わると、美鈴はすぐに日本を出てしまった。僕ら人間にとって、心が繋がっていればどこにいても大丈夫な気がしていた。

数日後、各々の家には美鈴からエメールが届いていた。

「ねえ、お兄ちゃん……」

本当に言わなくても良かったの？」

手紙を見ながら隣にいる瑞葉が話しかけてきた。

「ああ、いいんだよ。」

言葉には表せない想いつてのもあるのさ」

「けど、正式には言っていないってことはさあ」

まだ私にもチャンスはあるってことだね……お・に・い・ちゃ・ん」

そんな僕らは相変わらずの日々を送っていた。

けど、いつかはきつと……

自分の想いを伝えられる日が来るのだろう……

その日まで、こんな日常も悪くないと感じ始めていた。

最終話 君の瞳に映る僕（後書き）

改めまして、こんにちはブッシュです。

正直言いますと……

後味悪く完結しました！

つということ、実はこの話……

一見良い話で終わったかのように見せて実は終わってないのです！
一様は一区切りという形を取らせていただきましたが、今後は第2幕を制作予定であります。

（いつになるかはわかりませんが……）
とりあえず、乞うご期待つということ……

さて、これからはまた新しい話を書きたいところなんです……
3年越しにもう一つの方の手直し & a m p ; 更新を始めたいと思います！

最後に、今まで読んで下さった皆様
更新しない日々が続く、大変ご迷惑をおかけしたことをここに謝罪
と共に、今後とも愛読の方をよろしくお願いしたいと思っております。

本当に今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3431e/>

君の瞳に映る僕

2010年10月15日21時16分発行